

金剛寺遺跡

発掘調査概報

1988

田原本町教育委員会



十市郡金剛寺村実測全図(明治22年5月30日)
(田原本町管財課保管)

明治22年に測量された地籍図であるが、地割の状態から中世末期の金剛寺城の範囲を把握することができる。特に、金剛寺城の濠が東及び北側でよく残っている(本文第29図参照)。また、調査地である425番地の南東部が、水田として区画されているのは429番地の濠の延長を示しているのであろう。これは発掘調査によって確認された。

序

奈良盆地のほぼ中央部、20.59平方キロメートルの田原本町のちょうど西よりに、北流する曾我川に接して、金剛寺の村はあります。

東には飛鳥川をのぞむ、古くからの農村地域です。

この地に、田原本町公民館金剛寺分館を建設することとなり、昭和62年5月から工事に先がけて発掘調査を行いました。

今回の発掘調査は、いわゆる周知の遺跡地ではありませんが、金剛寺の歴史性や小字名が「土手矢倉」、さらに隣接して「阿弥陀院」、「城畠」などの名がある事から、中世遺跡の可能性が強いため、調査を行った訳であります。

ここにその成果の概要を御報告出来ることになりましたが、田原本町においてまた新しく「金剛寺遺跡」が周知の遺跡として加わりました。

地区公民館という限られた土地内での建築のために、工事に支障をきたさない範囲での調査を余儀なくされ、充分な報告とは言えませんが、中世の館の存在が確認出来たことは一つの成果がありました。

本書に示しました調査成果を、いくぶんなりとも御活用たまわれば幸いです。

昭和63年3月

田原本町教育委員会

教育長 岩井光男

例　　言

1. 本書は田原本町教育委員会が田原本町公民館金剛寺分館建設（社会教育課）に伴う事前調査として実施した金剛寺遺跡の発掘調査概要である。

2. 調査は、櫻原考古学研究所の指導を得て以下のとおりの関係者でおこなった。

田原本町教育委員会 教育長 岩井光男

教育次長 吉川周伯

文化財保存課課長 森口淳

文化財保存課課員 沢井利夫

藤田三郎（現地調査）

3. 調査にあたっては、金剛寺自治会長 鈴木義光氏をはじめ、調査地隣地の吉岡与兵治、福井博、鈴木茂之各氏ならびに金剛寺在住の方々に御理解と御協力を賜わった。記して感謝します。

4. 調査補助員として、広瀬克彦・豆谷和之（奈良大学）、河野一隆（京都大学）の学生が参加した。

出土遺物の整理作業にあたっては上記学生の他、桑原久男（京都大学大学院）、樋泉彰子（奈良大学）、有本雅己、梅原一恵、河野典子の学生諸氏の協力があった。

5. 本書の作成にあたっては、下記の方々より御教示を賜わった。記して感謝の意を表します。

廣吉壽彦（県立櫻原高校校長）、松井松長（福山大学教授）、大矢良哲（日本地名学研究員）、梶尾佐市郎（田原本町立田原本小学校教諭）、辻本良尊（榮山寺住職）、里見多聞（教安寺住職）、清原信彰（正福寺住職）、森下恵介・立石堅志（奈良市教育委員会）の諸氏。

6. 本概報の執筆は、Ⅲ. 遺物 3. 中世の遺物 石製品は有本雅己があたり、他については藤田が執筆し、編集をおこなった。

出土遺物の赤外線写真は森口淳が撮影した。



現地説明会風景

5月30日

目 次

I. 序 章	
1. 調査契機と経過	1
2. 位置と環境	3
II. 遺 構	
1. 層序	4
2. 中世の遺構	6
S D-52, S D-53・S D-54, S D-51・S D-55	
S K-51・S K-52	
3. 近世・近代の遺構	9
S D-01・S D-02, S E-01	
III. 遺 物	
1. 弥生時代・古墳時代の遺物	10
弥生土器, 土師器	
2. 飛鳥時代・奈良時代の遺物	10
土師器, 須恵器	
3. 中世の遺物	11
土器, 瓦, 木製品, 石製品	
土製品, 銭貨, 自然遺物	
4. 近世・近代の遺物	26
土器	
IV. まとめ	
1. 金剛寺遺跡の性格	27
2. 金剛寺遺跡と周辺の中世遺跡	30

付. 金剛寺遺跡——史料編——



現在に残る濠(集落東側)

I. 序 章

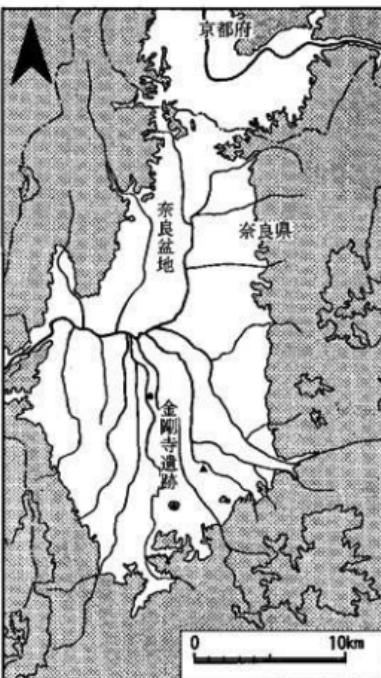
1. 調査契機と経過

金剛寺遺跡は奈良県磯城郡田原本町大字金剛寺に所在する遺跡であるが、奈良県遺跡地図には大字金剛寺の北方にひろがる遺跡(11-C-29)として記載されている。今回の調査地は大字金剛寺425-5番地で、周知の遺跡としては認識されていなかったが、小字名が「土手矢倉」であり隣接地には「阿弥陀院」・「堀田」・「城畑」・「北口」という小字名が残っている。また、文献史料においても、「金剛寺殿」や「金剛寺城」なる名前が散見することから、これらを総合して考えるならば、金剛寺遺跡は当該地を包括した範囲にひろがる中世城館の性格をもつ遺跡であることが予想できた。

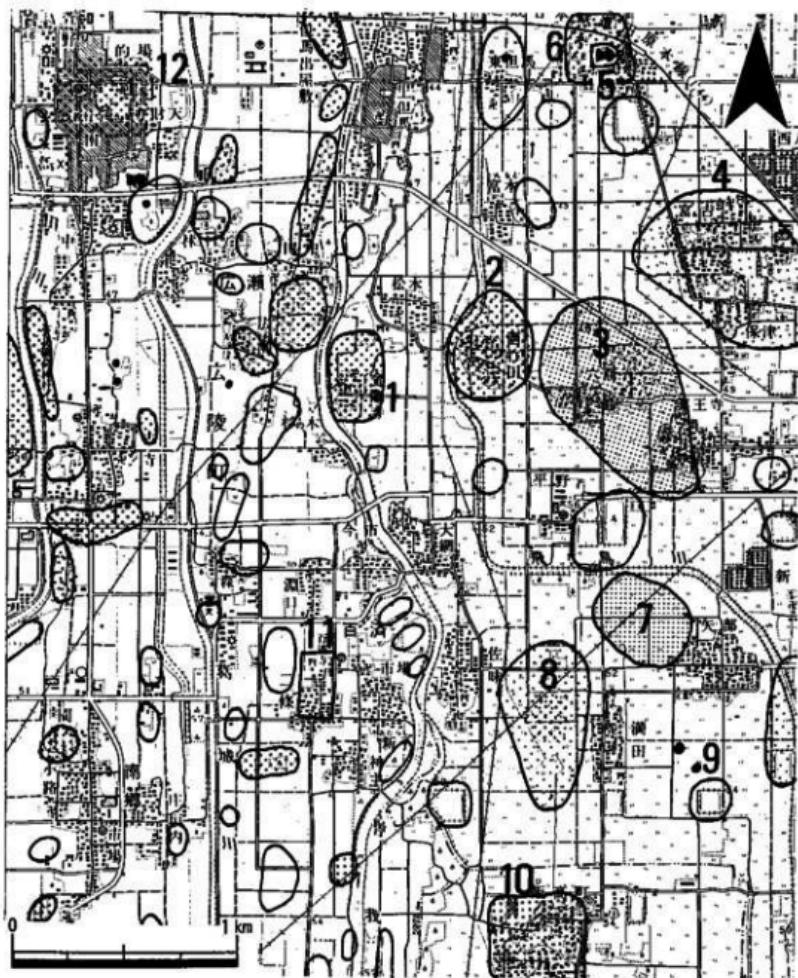
第1表 調査地の概要

所 在 地	原 因	地 目	土地所有者	調査期間	調査面積(対象地)
田原本町金剛寺425-5番地	町公民館分館建設	宅地	田原本町	1987.5.9 ～ 6.8	125m ² (496m ²)

このようなことから、公民館建設にあたっては事前の調査が必要であると判断し、発掘調査をおこなうことで一致をみた。発掘調査は昭和62年5月9日から同年6月8日まで要した。調査は発掘面積が小さく、また、客土が厚いことから下層での遺構の把握は困難を極めた。下層遺構面は当初の調査面積の二分の一程度である。調査では上層遺構面で近代の大溝2条、下層遺構面で中世の大溝3条を確認することができた。中世の大溝では橋脚の一部を検出できたことから、橋の全容を知るため、トレンチを拡張した。大溝内からは多量の遺物が出土し、居住区であることは確実となった。また、一連の大溝群が、文献にみる金剛寺氏と時期的に合致することから、両者を関連づけられる可能性が高くなった。小規模な調査であったが、金剛寺遺跡の一端が明らかになったことは重要な成果である。



第1図 金剛寺遺跡の位置



- | | | |
|--------------|------------|------------|
| 1. 金剛寺遺跡 | 7. 矢部遺跡 | 主要弥生時代遺跡 |
| 2. 西竹田遺跡 | 8. 佐味遺跡 | |
| 3. 十六面・薬王寺遺跡 | 9. 圓栗山古墳 | 主要古墳時代遺跡 |
| 4. 保津・宮古遺跡 | 10. 飯高遺跡 | |
| 5. 黒田大塚古墳 | 11. 百濟寺 | |
| 6. 黒田遺跡・法楽寺 | 12. 箸尾城推定地 | 中世遺物散布地・遺跡 |

第2図 金剛寺遺跡周辺の遺跡分布図（2万5千分の1）

2. 位置と環境

金剛寺遺跡は奈良盆地のほぼ中央にあたる磯城郡田原本町大字金剛寺小字土手矢倉他に所在する。田原本町域内では最も西に位置し、曾我川を挟んで広陵町と接している。この地域は飛鳥川・曾我川・葛城川・高田川が近接して北流し、自然堤防が多く形成されており、この自然堤防上には現在の集落や遺跡などが立地している。遺跡地周辺は水田や畑地が広がり、田園風景がみられる。この付近の標高は45m前後で、盆地内でも低い所である。微地形は南東から北西方向に緩やかに傾斜し、田原本町薬王寺から広陵町箸尾、また、橿原市飯高町から箸尾方向への旧河道跡が地図から読み取れる。

金剛寺遺跡周辺の遺物散布地の密度は高いが、遺跡の内容が明らかにされているものは少ない。曾我川を境に東側は弥生時代から中世まで続く、保津・宮古遺跡³、十六面・薬王寺遺跡⁴、佐味遺跡⁵などが散在しているのに対し、曾我川の西側は中世の小規模な遺物散布地が多くみられる。これらの遺跡の中で金剛寺遺跡と同じように中世の館跡と考えられるものに、発掘調査で明らかになった十六面・薬王寺遺跡が東方1kmにある。類似する性格をもつと思われる佐味遺跡は南南東1.5kmにある。また、本地周辺部の盟主的存在である箸尾氏の居城（箸尾城）は金剛寺遺跡の北西1.5kmに推定されており⁶、中世の重要遺跡がある一定の距離をおいて存在していることは注目される。さて、金剛寺遺跡地内の小字名としては、北口・城畠・堀田・西口・土手矢倉・阿弥陀院・鍵田などの呼び名が残っており、「金剛寺城」として小字名から容易に類推できる。



第3図 金剛寺遺跡周辺の小字名（拠「大和国条里復原図」）

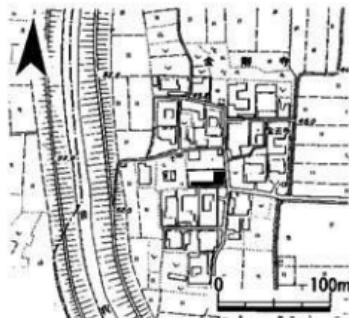
II. 遺構

1. 層序

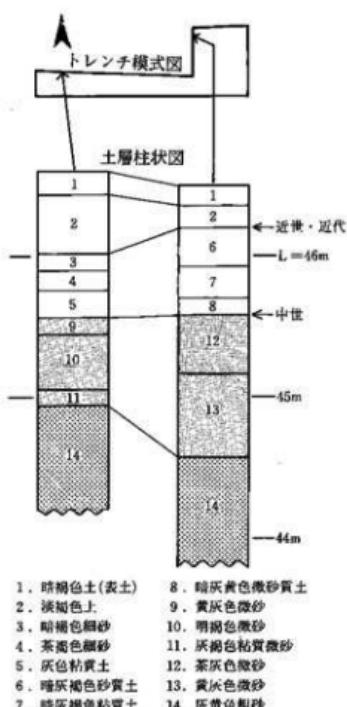
調査地はほぼ金剛寺集落の中心に位置し、周辺は住宅となっている。西側隣接地は弥都波能売神社、北東側には金正寺がある。本地は数年前まで雑木が植栽されていたが、切り倒され荒地となっていた。古老の話によると、60年前頃までは蓮の花が満ちる池であったらしい。それが、西側の神社地に盛土をおこなうについて当池も埋めてしまったらしい。したがって、明治・大正年間は池であって、昭和に入って現状になったことがわかった。

この池の堆積土は調査においても確認された。池の堆積土は暗褐色砂質土あるいは粘質土で、調査対象地の中央部分のみで検出されていることから、さほど大きな池にはならないであろう。

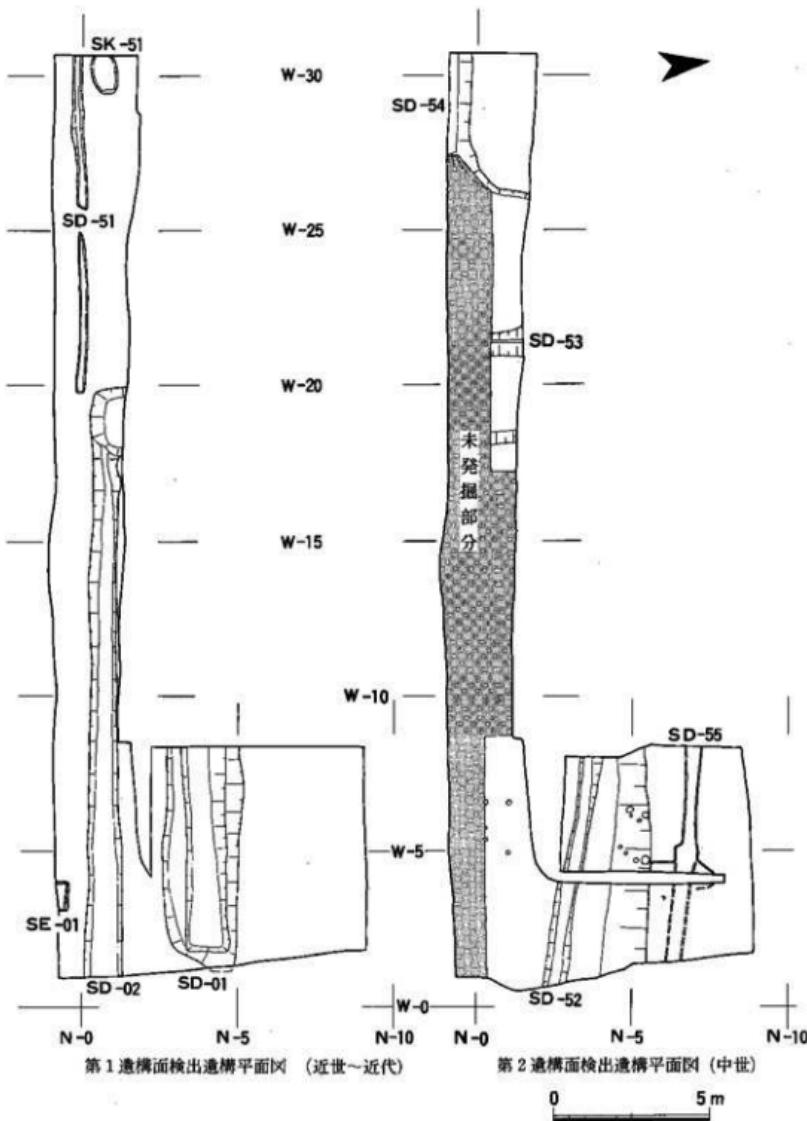
さて、近世以前の基本的な土層堆積であるがトレンチ西端と東端では様相が異なる(第5図)。トレンチ西端では第3層：暗褐色細砂層、第4層：茶褐色細砂層がみられ、中世大溝を覆っている。この両層は粒子が均一で、一時に堆積した状況を示していることから洪水堆積物であろう。これとは対照的にトレンチの北東側では第6層：暗灰褐色砂質土層、第7層：暗灰褐色粘質土層がみられ、居住空間であったことがうかがわれる。第3層から第8層までの近世の堆積層を除去すると、安定した中世遺構面が検出される。トレンチ西端では第9層：黄褐色微砂層、北東側では第12層：茶灰色微砂層と同質層で形成され同時形成と思われる。これら微砂層の下には第14層：灰黄色粗砂層があり、不確実ではあるが、古墳時代後半の土器が存在するようで、古墳時代の河道の可能性がある。



第4図 金剛寺遺跡調査位置図 ($S = \frac{1}{5000}$)



第5図 金剛寺遺跡土層柱状模式図 ($S = \frac{1}{500}$)



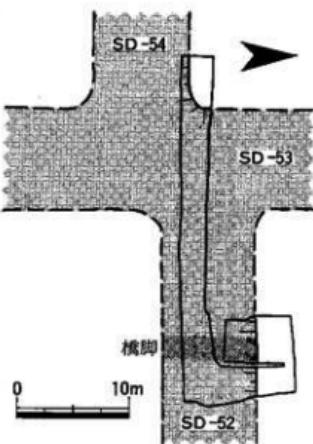
第6図 金剛寺遺跡造構平面図

2. 中世の遺構

中世の遺構は大溝・小溝・土坑がある。大溝はトレンチのほぼ全城にわたり、溝でない部分はトレンチの西端と北東端だけとなる。大溝は3条と思われ第7図にみるような位置関係になる。小溝 S D-51と土坑 S K-51はトレンチ西端で検出している。

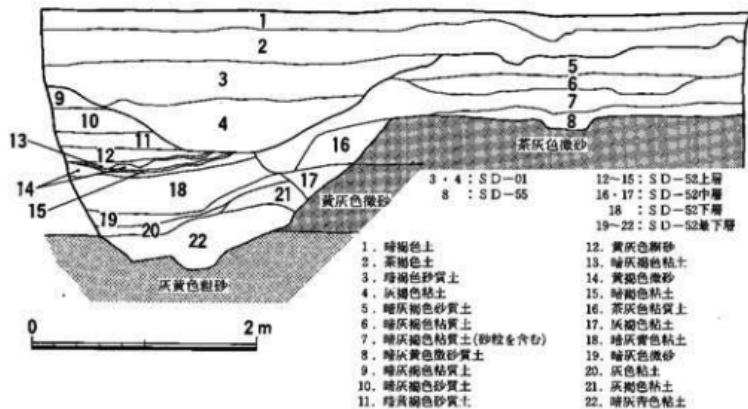
S D-52

S D-52は東西に走向する大溝で、今回の調査では主要な遺構となる。トレンチ北東側拡張区で大溝の北肩と橋脚部分を検出した。溝の推定幅8m、深さ1.4mを測る。延長約15mにわたって検出されたが大溝の南半は隣地の関係上、未掘となつた。本溝の西側はS D-53・S D-54と鉤の字状に合流する。溝の堆積状況は北半のみしかわからないが、大きく四大別できる。上層は埋没した溝の凹地に堆積した砂層堆積で、灰黄色粗砂層や黄灰色細砂層・黄褐色微砂層などで形成されている。所々に粘土を挟み、互層となっている。これらは洪水堆積物であろう。中層は大溝の北肩部分のみに形成されている茶灰色粘質土層で、土器や人頭大の石を多く含んでおり人為的埋土と考えられる。下層・最下層は暗灰青色粘土層で、土器・木器類など多量の遺物を含んでいた。木製品は多様で

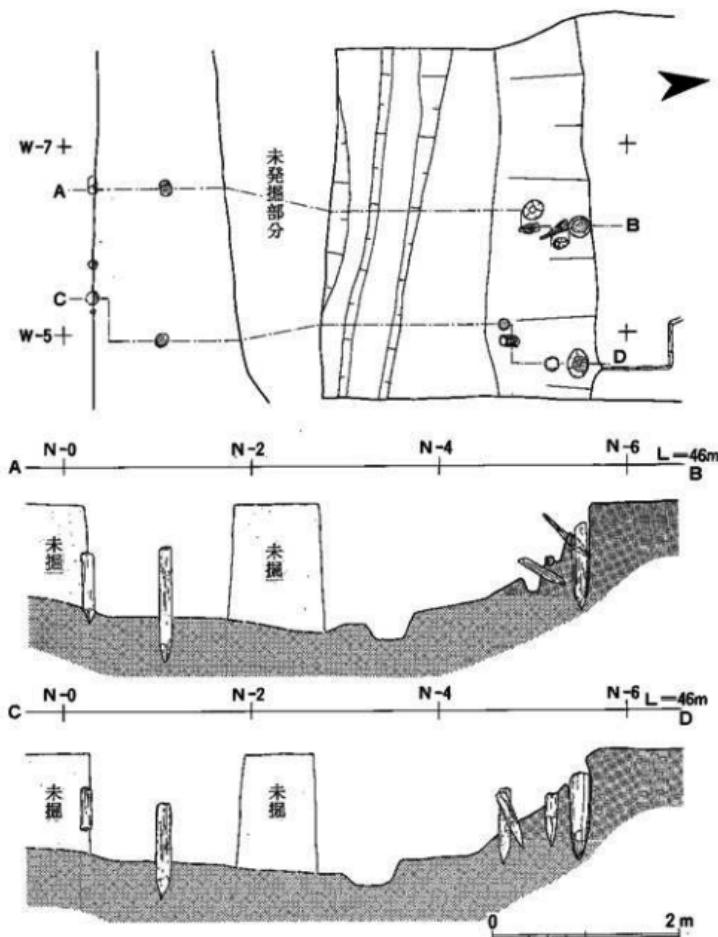


第7図 中世大溝配置図

N-3 N-5 N-7 L-47m



第8図 SD-01・SD-52西壁土層断面図(北東拡張区)(S=1%)



第9図 SD-52橋脚部分平面図及び見とおし図 (S=%)

下駄・羽子板・椀蓋などがある。特に注目されるものとしては五輪塔卒塔婆がある。また、錢貨(聖宋元寶)、鐵滓、送風管なども出土している。

さて、本遺構で最も重要なのは橋脚を検出したことである。橋脚は溝にほぼ直行するように二列に打たれており、14本分検出した。残存している橋脚は溝の北肩と中央部分の二ヶ所でその他

の部分については検出できなかった。北側の橋脚では北端の橋脚が一番太く深く打ち込まれている。これより溝の内側の橋脚では溝方向に斜めに打ち込まれているものもある。橋脚の幅は約1.5mあるが、各々の橋脚は一線上に並ばず、粗雑な橋といえよう。橋の上部構造についてはわからぬが、橋脚の組み方から第10図にみられるような橋脚の構造が想定されよう。

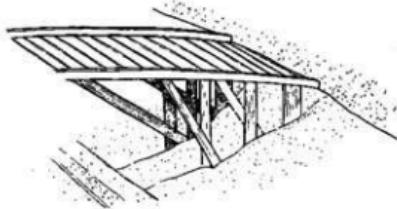
S D-53・S D-54

S D-53・S D-54はトレチの西端で検出した大溝である。両大溝の合流部分のコーナーを確認したのみで、両溝の規模等については明らかでない。S D-53は南北に走向する溝で、上部に近世のS D-02が掘削されていることから、S D-52との関係や溝の堆積状況が明らかにできない点がある。しかし、トレチ北面の土層の堆積状況からすると、S D-52とS D-53は同時に開口していたと思われるが、S D-53の溝はやや西側に拡張しながら、S D-52より遅れて埋没したようである。溝の堆積では西側部分に砂層と粘土層の互層堆積が深さ1mにわたってみられる。このような砂層堆積状況はS D-54についても同様で、S D-53とS D-54の埋没は洪水によるものと思われる。遺物は少なく、土器が少量出土した。

S D-54は東西に走向する大溝でS D-52とは約6m南側に位置することになる。溝の北肩を検出したのみで規模等は明らかにできない。遺物は少量の瓦器が検出された。

第2表 金剛寺遺跡検出溝一覧表

溝番号	規模(m)			走行方向	時 期						主要遺物	備 考
	幅	深度	標高		14 c	15 c	16 c	17 c	18 c	19 c		
SD-01	2.5	0.8	45.3	東西								
SD-02	2.3	0.6	45.4 44.8	東西・南北								L字形に なる
SD-51	0.3	0.05	45.4	東西				—				小溝
SD-52	(8.0)	1.4	44.2	東西							銭貨、下駄、羽 子板、五輪塔等 等、土器	大溝 橋脚
SD-53	(9.0)	1.4	44.2	南北								大溝
SD-54	—	—	—	東西								大溝
SD-55	0.4	0.1	45.45	東西				—				小溝



第10図 S D-52橋造構復元図

S D-51・S D-55

S D-51・S D-55は東西に走向する小さな溝である。S D-51はトレンチ西端で検出した。本溝はS D-54の北肩部分の上部に掘削されたもので、溝幅約0.3m、深さ0.05mという浅い小溝である。溝の埋土は暗灰褐色微砂質土層で、溝のベース層（黄灰色微砂層）にちかい土質であることから、掘削後直ちに埋没したようである。出土遺物は少ないが、瓦器の火舎が出土した。S D-51の時期はS D-54埋没直後でよいと思われる。

S D-55はトレンチの北東拡張区で検出した。S D-52の大溝の北側約1mで平行するように掘削されている。溝の規模は幅0.4m、深さ0.1mを測る。溝の埋土は暗灰黄色微砂質土で、前述S D-51と同じような状況であることから、掘削後早くに埋没したようである。遺物はないが、S D-51と同時期であろう。両溝とも性格についてはわからない。

S K-51・S K-52

S K-51はトレンチ西端で検出した土坑である。S D-54の北側に掘られたもので、推定直径は1.4m、短径0.75m、深さ0.15mを測る楕円形プランの浅い土坑である。土坑の埋土はS D-51と同様、暗灰褐色微砂質土層である。遺物は土師器小片が出土している。時期はS D-51と同時期であろう。S K-52はトレンチ東端で検出したが規模は不明である。時期は平安時代である。

3. 近世・近代の遺構

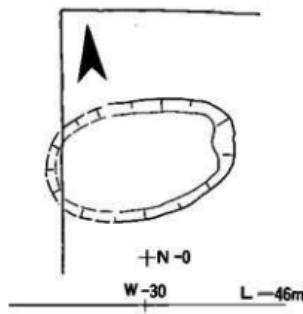
S D-01・S D-02

S D-01・S D-02はS D-52の上面に掘削された東西方方向の溝である。S D-01は東端で終束するようである。S D-02はトレンチ中央部で北へ走行し、L字型となる。いずれの溝も本地中央部にあった池に注ぎこむと思われる。溝の時期は江戸時代末～大正期までであろう。

S E-01

S E-01はトレンチ東端で検出した板組みの井戸であるが、未掘である。

+N-2

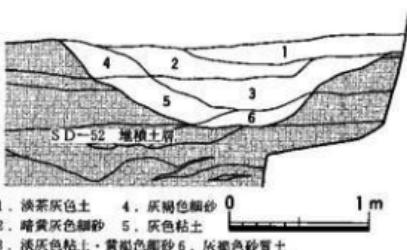


第11図 SK-51遺構平面図
及び断面図 (S = 1/40)

N-2

N-0

L=46.5m



第12図 SD-52東壁断面図 (S = 1/40)

III. 遺 物

1. 弥生時代・古墳時代の遺物

弥生時代・古墳時代の遺物は非常に少なく、すべて中世遺構等から出土していることから、二次的な混在資料の土器である。

弥生土器（第13図-1・2）

第13図-1・2は弥生時代後葉あるいは末に位置づけられる高杯の脚部である。1・2ともに「ハ」の字状に裾部がひらく形態である。1には径0.8cmの円形の透孔が穿たれている。内面にはしづら痕がみられる。色調は淡褐色を呈す。2はやや器壁の厚いつくりで、石英粒を多く含む胎土である。杯部の上端は小さな円板充填をおこなっている。内面にはしづら痕がみられる。色調は淡赤褐色を呈す。

土師器（第13図-3）

第13図-3は古墳時代前期の高杯杯部である。脚部とは接合部で剥離している。胎土は精良で淡赤褐色を呈す。外面には細かいハケがみられるが、ナデ調整によって消されている。内外面ともに器面が磨耗しているため、ミガキ調整はわからない。

2. 飛鳥時代・奈良時代の遺物

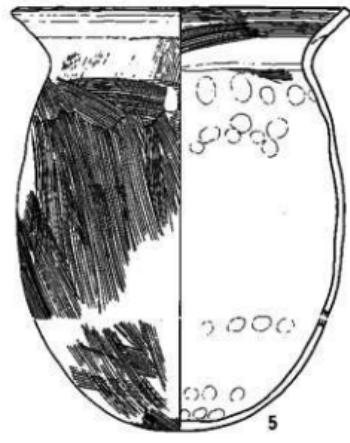
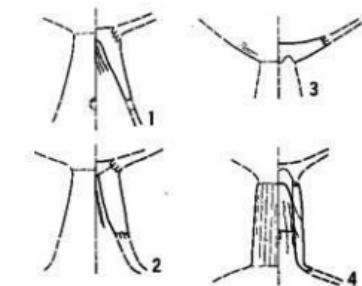
土師器（第13図-4・5）

第13図-4は飛鳥時代の高杯脚部と思われるが全体に磨耗が激しく調整はわからない。5も同時代のもので、長胴形の丸底の壺である。外

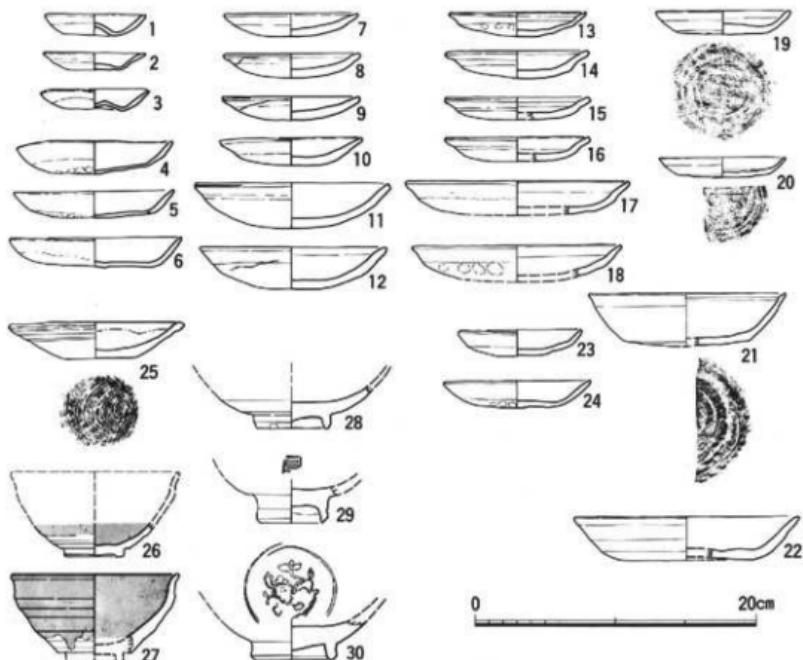
面は粗いハケ調整、内面はナデ調整をおこなう。底部ちかくは指頭圧痕が多く残る。砂粒を多く含んでいる。SD-52下のベース砂層より出土。

須恵器（第13図-6）

第13図-6は奈良時代の壺である。口縁部は直口し、内側に端面をもつ。頸部に凹線をめぐらしている。体部にはカキ目調整を施す。他に図版7-7の杯身、同-8の杯蓋のつまみがある。



第13図 弥生土器他実測図 (S=1/4)



第14図 土師器皿・施釉陶器・磁器実測図 (1~30: S D-52出土) (S = 1/4)

3. 中世の遺物

中世の遺物としては若干平安時代から鎌倉時代にかけての土器があるが、大半は室町時代を中心とした16世紀代の遺物である。これらの遺物はSD-52から出土したもののが主で、他にSD-53・SD-54・SD-51からもわずかに出土している。土器が最も多く、他に木製品・石器などがある。これらの遺物はほとんど時期差はみられないものである。

土器

土師器皿(第14図-1~24) 土師器皿は胎土・形態・手法などから数種類に分けることができる。これは層位的にも大まかに各々の型式が対応することから時期差を示していると思われる。第14図-1~24はすべてSD-52から出土している。溝の上層からは8・9・11・13・15・18・22が、中層からは1~3・6・7・12・14・16・17・19~21が出土しているが、これらの中で中層の上位から出土しているものは16、下位からのものは3・14がある。また、溝の下層からは4・5・23・24が、溝の底直上からは10が出土している。

1~3は小形の皿で口径が7~7.5cmほどのものである。底部中央を突出させ、口縁部は強

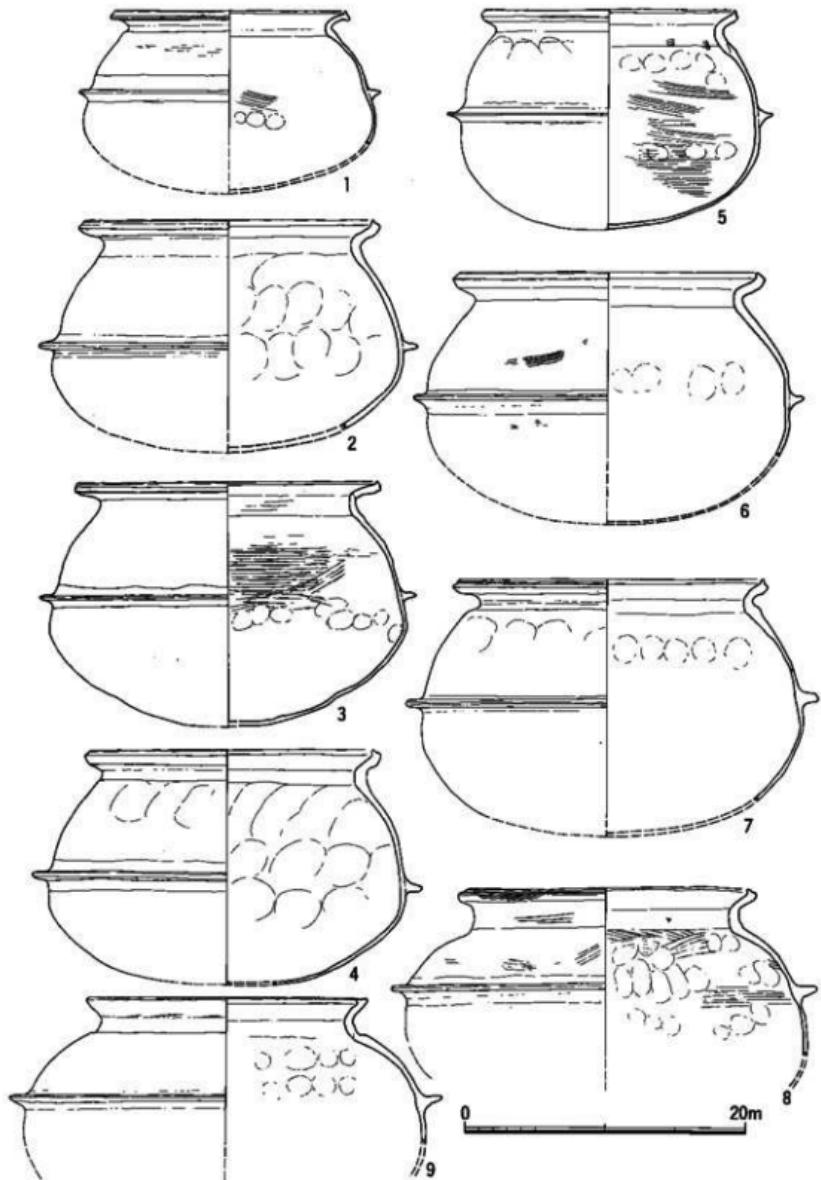
くヨコナデをおこなう。これら3点の形態・手法は同じであるが、1・2は暗褐色を呈し、胎土には雲母と赤色斑粒が多く含んでいる。これに対し、3は灰黄色を呈し、堅緻な焼成である。4～6は中形の皿である。これらも全体に薄く仕上げられ、灰黄色を呈し、堅緻な焼成である。外面の底部には小さな指頭圧痕を多く留める。7～12と13～18は類似する二群の皿である。この二群の土器は前者では7～10の小形と11・12の大形、後者では13～16の小形と17・18の大形の二セットで構成されている。これら二群の土器はほぼ、淡赤褐色を呈し、石英粒等を混えるざらざらした感触の胎土を有するものである（14は灰褐色を呈し、異なる）。このような共通する胎土をもつ二群であるが、前者（7～12）は口縁部のヨコナデが弱く、口縁端部が丸くなるのに対し、後者（13～18）はヨコナデが強く、口縁部と底部との境に段ができる、口縁端部は面をもち、ハネ上げ口縁ぎみになる。この差はヨコナデの強弱による差と思われる。19～22は底部外面に成形時の粘土巻き上げ痕を残すものである。小形（19・20）と大形（21・22）で構成される。これらの土器はロクロの使用を思わせるほど、ヨコナデ手法が発達している。小形皿は平らな底部に短く外反する口縁部を有する。口縁部内側はやや肥厚する。大形皿は深みのある皿となる。これらの底部は巻き上げの痕跡とともに板目状の圧痕があり、板の上で乾燥させたと思われる。胎土は精良で、やや赤みをおびた褐色を呈す。堅緻な焼成である。19は灰褐色を呈し、異なる。23・24は上記いづれにも属さないタイプであるが、4～6のタイプの小形品とすべきものかもしれない。全体に器壁が厚い点や焼成がやや堅緻でない点が異なる。

施釉陶器（第14図-25～27）瀬戸・美濃系の施釉陶器である。25は灰釉の小皿である。口縁部はやや肥厚し、面をもつ。底部には糸切痕が残る。灰釉は口縁部内面にわずかにかかる。SD-52の溝底直上より出土した。26・27は天目茶碗で、鉄釉がかかる。26の高台は削り出し高台であるが、高台の突出は小さい。27は口縁部を小さく外反させる。26はSD-52の中層下位、27は中層より出土している。

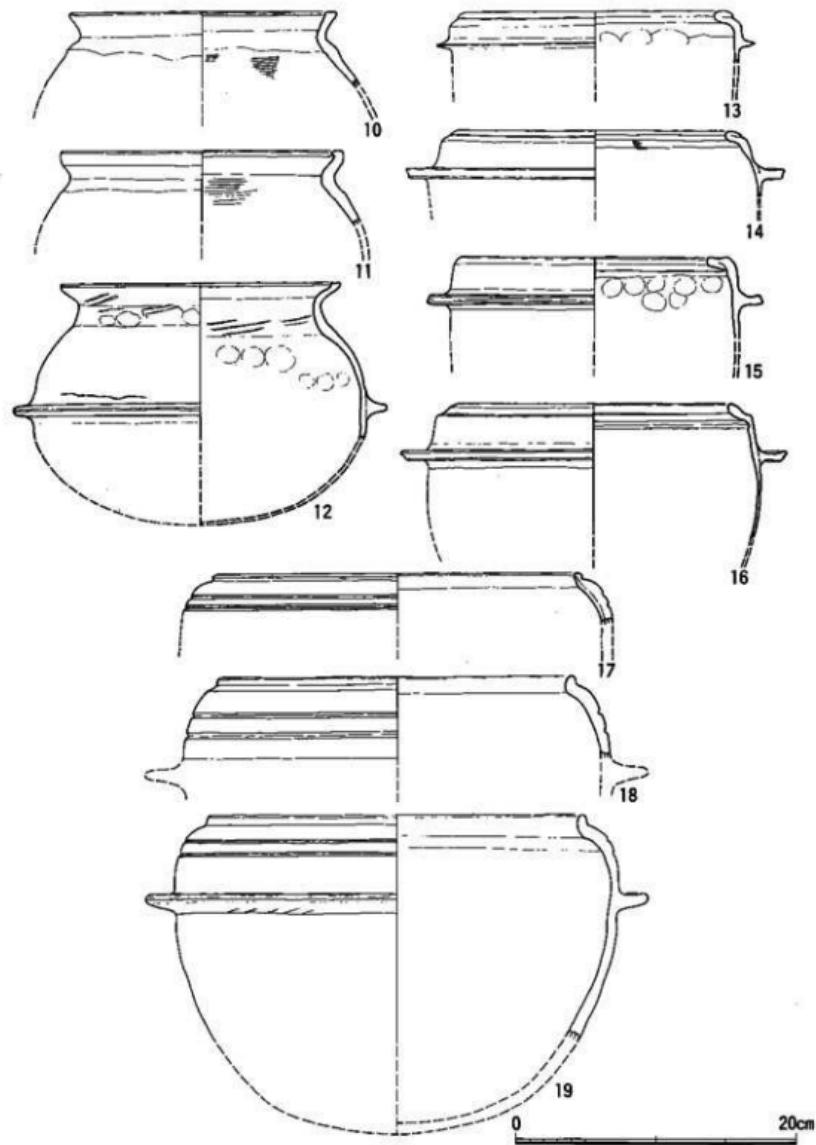
磁器（第14図-28～30）28～30は青磁茶碗である。29・30は龍泉窯系と思われる。いずれも削り出し高台で、高台端部は角頭となっている。釉は全面にかかっている。29の見込み部分には雷紋状、30には花弁が描かれている。29の破面には漆が残っており、破損した茶碗を接合していると思われる。いずれもSD-52出土で、28は中層上位、29は溝底、30は上層より出土した。

羽釜（第15～17図）第15～17図に図示した羽釜はすべてSD-52より出土したものである。溝の上層より出土したものは第15図-1、第16図-11・12・18で、中層の上位では第15図-3・第16図-15が、中層の下位では第15図-2・4・6・7、第16図-10・14・16・17・19・21・22・25が出土している。上記以外の羽釜は下層より出土した。

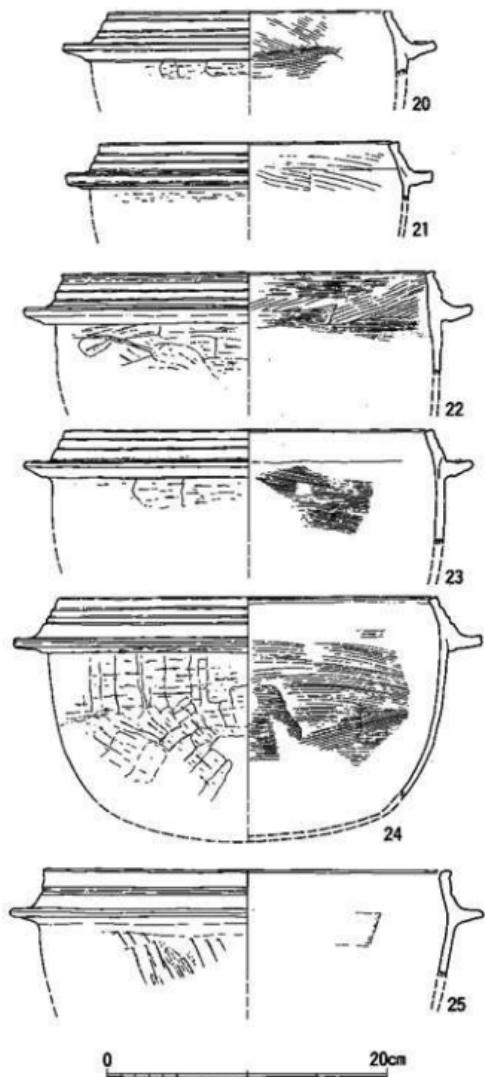
羽釜は大きく土師器（第15図・第16図-10～17）と瓦器（第16図-18・19・第17図）の二つに分かれる。土師器のものは形態的には外反する口縁部を有するもの（1～12）と内湾する口縁部（13～17）の二者がある。外反する口縁部を有する羽釜はさらに口縁形態や底部の形態で5型式に分離することができる。A型式（1）は小形の羽釜で口縁部が外反したままで、ハネ上げ口縁とな



第15図 羽釜実測図 1 (1~9: SD-52出土) (S=34)



第16図 羽釜実測図2 (10~19: S D-52出土) (S = 1/4)



第17図 羽釜実測図3 (20~25: SD-52出土) (S=3)

るものである。B型式(2~4)とC型式(5~7)は鈴より下の底部に違いがみられ、前者は鈴よりやや下に最大胴径があり、扁平な底部となる。これに対し、後者の底部は丸くやや深みがある。D型式(8・9)は体部が全体に扁平になる形態である。口縁部はハネ上げているが、上面で端面をもつものもある。鈴は体部のやや上半よりに付く。E型式(10~12)は口縁部がやや直立ぎみに立ち上がるもので、口縁端部の上面は面をもっている。本型式の羽釜は胎土に砂粒を混在させるもので、緻密さに欠けている。器壁はA~D型式に比べて厚手となり、ナデ調整も丁寧さに欠ける。A~D型式は鈴より上半の外面にタタキ痕跡状の面が残るものが多い。また、2~4のように内面には当て具の痕跡と思われるものも残っている。これらの羽釜の胎土は緻密なもので焼成は良好である。色調は乳褐色を呈している。

外反する口縁部を有する羽釜に對し、13~17は内湾する口縁部を有するものである。13・14は口縁端部を上側へ折り返し、丸くおさめている。15は内側へ折り返し、16では粘土の折り返しがみられない。17は瓦器の形態のものであるが、土師器である。ゆるやかに内湾する口縁部を有している。

以上の土師器の羽釜に対し、瓦器のものも数型式に分かれる。18・19は内湾する口縁部で、口縁端部は小さく上方へ突出させる。これらは内外面ともに丁寧なナデ調整をおこなっている。20～25は直立する口縁部に2～3条の凹線をめぐらし、鋤より下の底部にはケズリ調整がみられるものである。20・21は小形、22～25は大形となる。20～24の羽釜はやや赤みをおびた灰褐色の色調で、胎土には砂粒を多く含んでいる。底部のケズリ調整は左から右へ動いている。このような特徴に対し、25の羽釜は黒灰色を呈し、ケズリの後ナデ調整をおこなっているため、明瞭なケズリの痕跡を残していない。この二者は別型式と思われる。

以上のようにみてくると、土師器の羽釜でA型式・B型式・E型式は溝の上層に多く、C型式やD型式・内湾する口縁部を有する羽釜、瓦器の羽釜は中層・下層に多いようである。このように羽釜の型式的な変遷がおえるようである。

瓦器摺鉢・練鉢（第18図） 第18図-1～8は瓦器の摺鉢である。すべてSD-52から出土したもので、1・2・5は中層、3・7は中層下位、4・6・8は下層より出土している。摺鉢はほぼ同一の形態で、平らな底部にやや内湾ぎみに立ち上がる体部がつく。口縁部は1が強いヨコナデのため、外側が凹んでいるが、他は丸い口縁部となる。口縁部内側には一条の稜線がみられる。これらの摺鉢は外面に粗いハケ調整を施した後、ナデでハケを消している。また、粘土の接合部には指頭圧痕が多く残っている。摺鉢の内面は丁寧なナデをおこなった後、横幅2.5cm前後（横歯9～10本）の原体で摺目を施している。摺目は七帯ほどで、摺目の間隔は大きい。摺目は下半部分が磨滅しており、また、横位の摺痕がみられることから、使用状況が窺える。また、底部の縁辺もやや磨滅しており、使用によるものと思われる。8は底部中央に径1cmの円孔を穿っており、濾過器として転用したのであろう。

9・10は瓦器の練鉢である。摺鉢に比べ、扁平な体部になる。外面の調整は摺体とかわらないが、内面は横位のミガキ調整が施される。9・10ともにSD-52の中層下位より出土している。

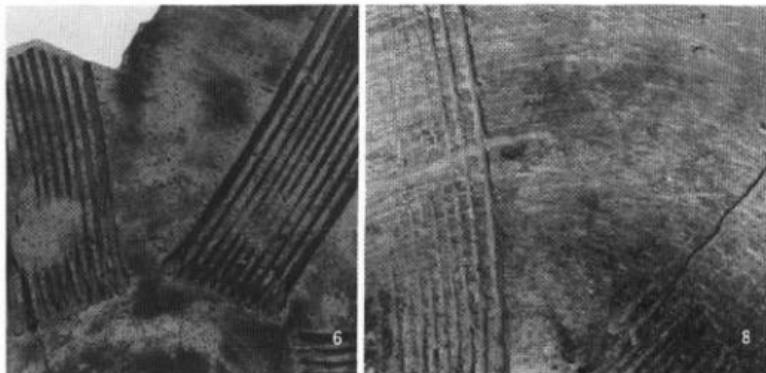
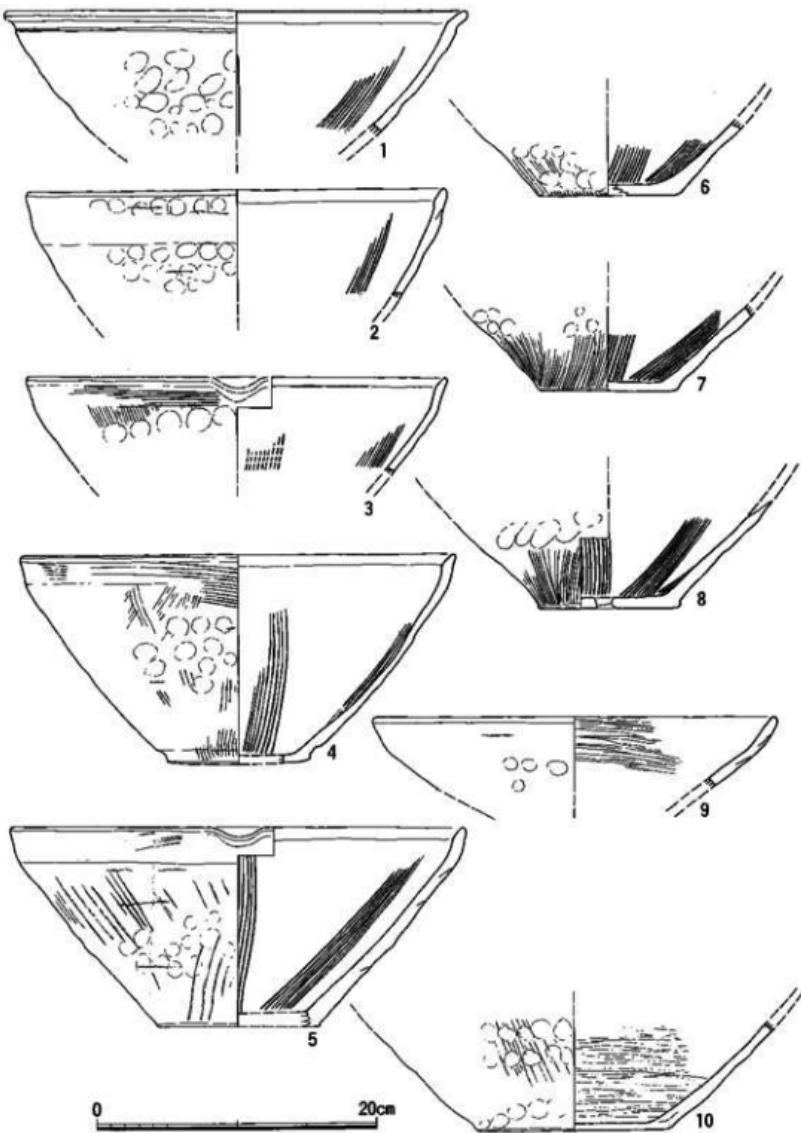
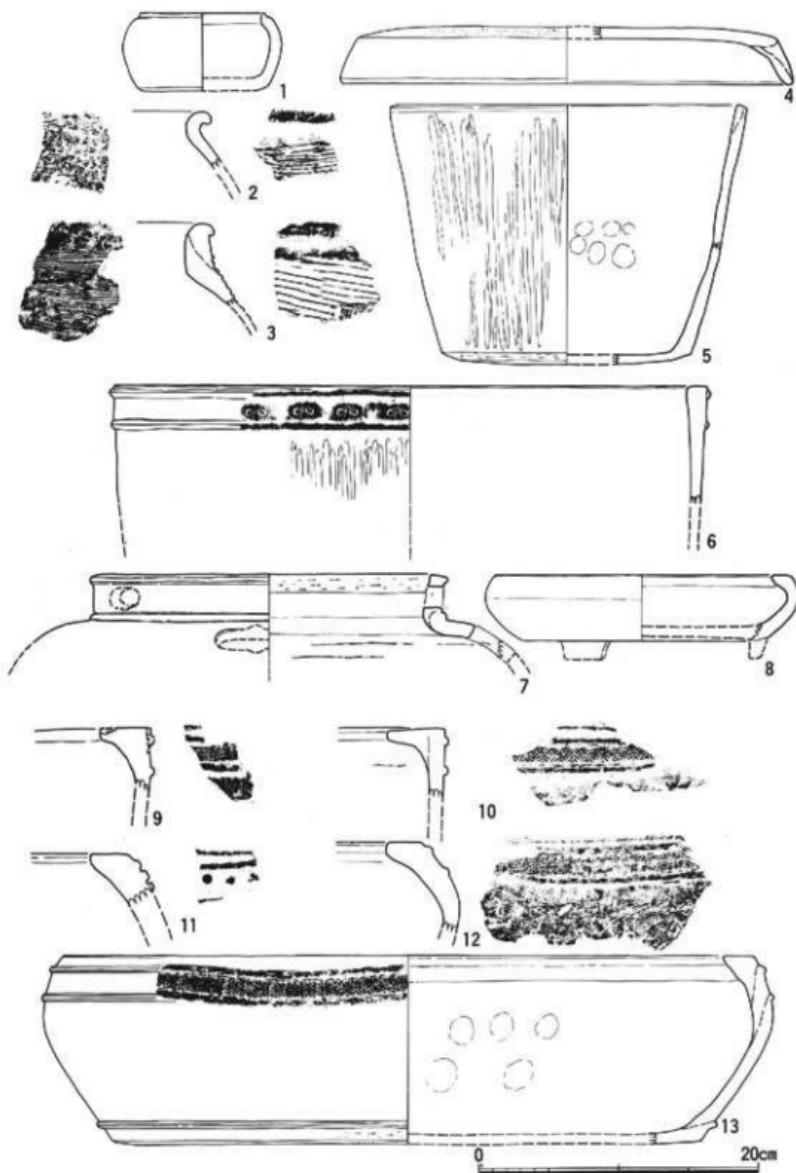


写真1 瓦器摺鉢の使用擦痕



第18図 瓦器摺鉢・練鉢実測図 (1~10: SD-52出土) ($S = \frac{1}{4}$)



第19図 瓦器実測図 (1～3・5～7・9・11: SD-52出土、4・8・13: SD-54出土、
10: SD-53出土、12: SD-51出土) (S-1/4)

瓦器小壺（第19図-1） 第19図-1はSD-52の中層から出土した瓦器の小壺である。扁平な体部に口縁部が上方へわずかに突出する形態である。内外面は二次的な火熱のためか、剥落して調整はみえない。内面はナデ調整と思われる。

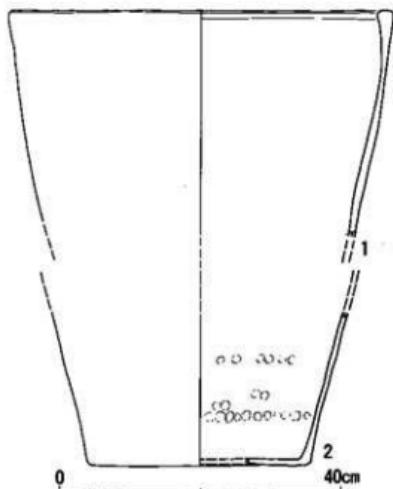
瓦器壺（第19図-2・3） 第19図-2・3はSD-52から出土した瓦器の壺である。2は中層下位から出土したもので、口縁部は小さく外反させ、やや下方へ折り曲げている。外面には平行条のタタキ、内面にはハケ後のナデ調整がみられる。3は中層より出土したもので、体部上端が厚くなり、口縁部はわずかに屈曲させ小さい口縁部となる。外面には左上がりのタタキ、内面には粗いハケがみられる。

瓦器鉢蓋・鉢（第19図-4～6・第20図-1・2） 第19図-4はSD-54の中層から出土した瓦器鉢の蓋である。扁平な体部で、天井部は砂目が残っていることから成形時は逆さにして口縁部をつけたと思われる。内面はナデ調整である。

第19図-5はSD-52の中・下層から出土した小形の瓦器の鉢である。やや上部がひらく体部を有するもので、外面は継ぎ目のミガキ、内面はナデ調整がみられる。底部の縁辺はケズリによって薄く仕上げている。6はSD-52の中層より出土した大形の瓦器鉢と思われるものである。鉢の体部上端には2条の突帯をめぐらし、その突帯間に3枚の花弁と雄蕊あるいは雌蕊を形どった花紋が押印されている。外面には継ぎ目のミガキがみられる。内面はナデ調整である。第20図-1・2はSD-52の上層・中層から出土した大形の瓦器鉢である。上部がややひらく形態で、口縁部は肥厚する。底部は平らで、砂目が残っている。内外面はナデ調整で内面には指頭圧痕が接合部分にみられる。

瓦器火舎（第19図-7～13） 瓦器の火舎は大きく4つの形態のものが出土している。7はSD-52の中層下位から出土したもので、壺の形態をとっている。球形になると思われる体部に直立する口縁部がつく。体部上端や口縁部には椭円形の透孔が穿たれている。外面は丁寧なミガキ調整、内面はヨコナデ調整がみられる。口縁部上部の内面はケズリをおこなっている。8はSD-54の中層より出土した円形の小形火舎である。扁平な体部で口縁部は内側へ突出する。脚台部が剥離しており、脚台の形態はわからない。

9・10は方形の火舎である。9はSD-52の上層、10はSD-53の上層から出土している。いずれも直立する体部に内側へ突出する口縁部



第20図 瓦器大鉢実測図 (SD-52出土) (S=1/6)

がつく。口縁部の上部は平らになっている。体部上端は2条の小さな突帯がめぐらし、突帯間に印紋がある。印紋の紋様は9が雷紋、10は木ノ葉状の印紋が刻まれている。11~13は円形の火舎である。形態的には8の大形品となる。11はSD-52の中層下位、12はSD-51、13はSD-54の中層から出土している。いずれも同じ形態で、体部上端に2条の小さな突帯をめぐらし、その間に印紋がある。その紋様は11が珠紋(円形浮紋に竹管を押捺)、12・13は菱形と花紋で構成されたものが刻まれている。12の印紋の型原体は幅3.1cm、13は3.8cmを計る。13は体部下端にも1条の突帯をめぐらし、突帯の下側にはケズリがみられる。底部には砂目が残る。

瓦

軒平瓦 (第21図-1) 第21図-1はSD-52の中層から出土した軒平瓦である。瓦当の右半分を残す。紋様は一重の郭線内に唐草紋が描かかれている。周縁はまだ幅が狭く、両側縁部も同じである。頭部は厚い。

平瓦 (第21図-2) 第21図-2はSD-52の中層から出土した平瓦である。凹面には布目が残り、凸面には菱形紋のタタキ紋様がみられるが一部はナデで消されている。

木製品

漆器蓋・椀 (第22図-1・2) 第22図-1はSD-52の中層下位から出土した漆塗の蓋である。口縁部は薄く仕上げられており、端部は外側に1条の沈線がめぐらされている。ロクロによって成形されたものである。外面は黒漆、内面は赤漆が塗布されている。

第22図-2はSD-52の中層より出土した漆塗の椀である。大きな高台部に深みのある体部を有する椀になる。内外面には黒漆が塗布されている。大部分の漆が剥落しているため、紋様等については不明である。

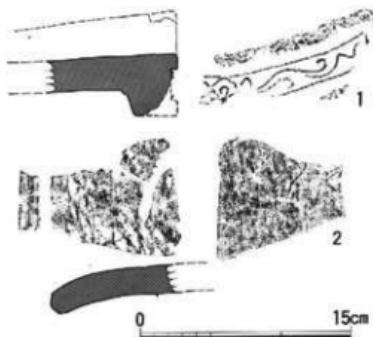


1

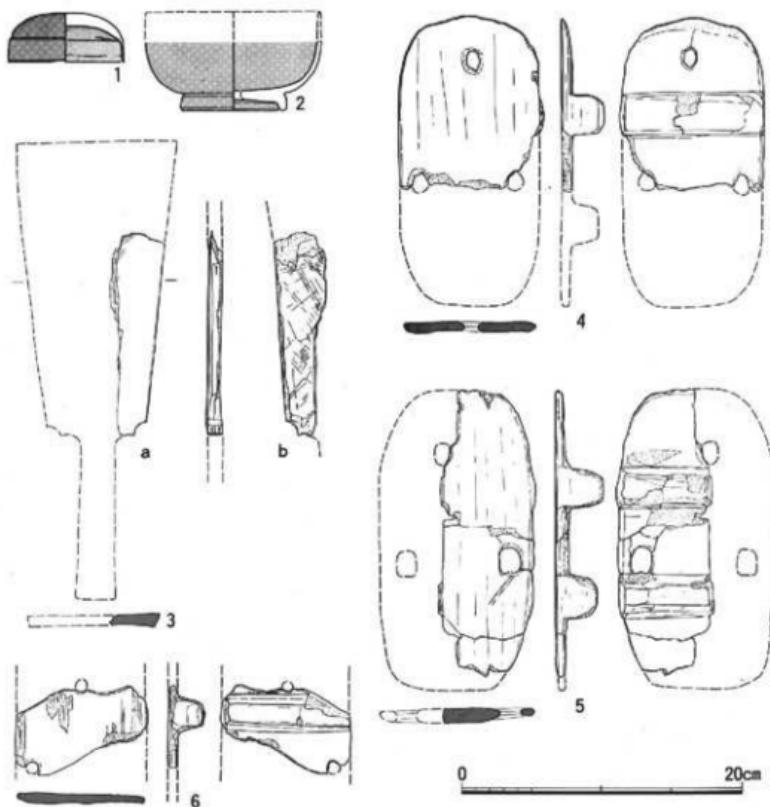


2

写真2 SD-52出土瓦器土管
(1:中層下位, 2:下層)



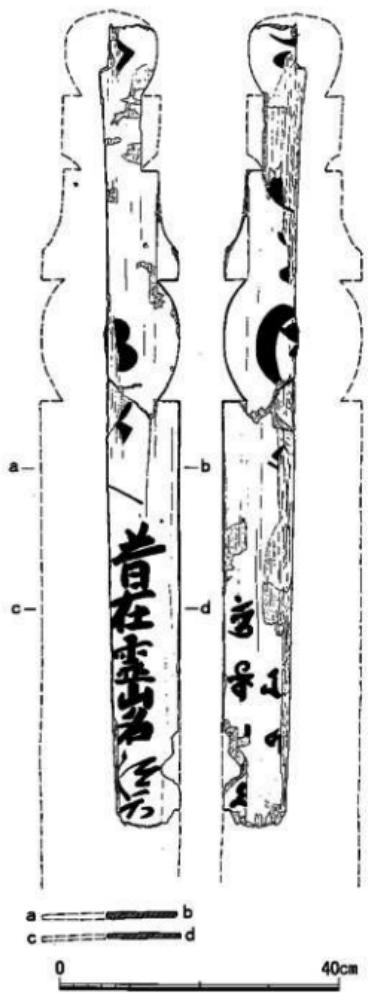
第21図 軒平瓦・平瓦拓影 (SD-52出土) (S=1/4)



第22図 漆器蓋・梳・羽子板・下駄実測図 (1~5: S D-52出土) (S=1/4)

羽子板(第22図-3) 第22図-3はS D-52の中層下位から出土した羽子板の断片である。羽根を打つ面の四分の一を残し、柄部との境に設ける二段の抉りがつけられている。羽根を打つ面(b面)は加工痕が多く残しているのに対し、裏面(a面)は加工痕がほとんどなく、丁寧に仕上げられており、一部に赤色顔料による塗布がみられるが、圓柄についてはわからない。

下駄(第22図-4~6) 下駄はS D-52より3点出土しており、4・5は下層、6は中層下位から検出した。4と5は形態や成形状況から対になる連歯下駄と考えられる。縦長の楕円形を呈す。4・5ともにツボは磨耗し、楕円形となっている。鼻緒留はみられない。後ツボは後歯に接するように前内側方向に穿たれている。下駄の先端の下側は使用のため、擦り減り尖っている。



第23図 卒塔婆実測図 (SD-52出土) (S=1/6)

また、前歯・後歯も同様に擦り減り、歯の角がなくなり丸くなっている。6は前歯部分の破片である。前ツボと後ツボ左側の穴が残っている。本品も全体に磨滅が進み、角はほとんどない。4・5に比べ、小振りの下駄である。

卒塔婆 (第23図) 第23図はSD-52層より出土した卒塔婆である。SD-52の大溝では橋が検出されたが、その橋の東側下から二つに折れて卒塔婆が出土した(図版6-b)。卒塔婆は厚さ1cmに満たない薄い短畠状の板を五輪塔形に形どったもので、現長114.8cmを計る火形品である。上端と下端を欠失しているがほぼ形のわかるもので、約半分を残している。風輪突出部は残っていない。裏面および空・風・火・水四輪の表裏は風化しており残存状況が悪い。表には五輪の各部に梵字が墨書きされているが、判読できない。地輪部の梵字の下には「昔在靈山名(經カ・酒カ)(力カ)」とまで読めるが欠損してわからない⁶。裏面も同じく各部分に梵字が書かれていたようであるが、風化が激しい。地輪部の下にも二行にわたってやや小さめの梵字が墨書きされている。復元すれば、もとは四行にわたって書かれていたようである。左端の梵字二字は明瞭に読めるが、その意味についてはわからない。表・裏ともに筆法は力強く書かれているが墨痕はわずかで全体に文字が浮かびあがっている。おそらく長期にわたって外部にさらされていたのであろう。「昔」の右上には釘穴らしきものがあるが穴は小さい。釘穴とすれば、何かに打ちつけていたのかも知れない。表の墨書きからすれば、追善供養の塔婆ではないと思われる。類例をまちたい。

石製品

本遺跡から出土した石製品は、砥石2点、火打ち石3点、火打ち石の原石1点である。以下に遺物の説明をおこなう。

砥石（第24図-1・2） 1は剥片の主要剥離面を研磨した比較的薄くつくれられた砥石で、上部は古くに折損している。

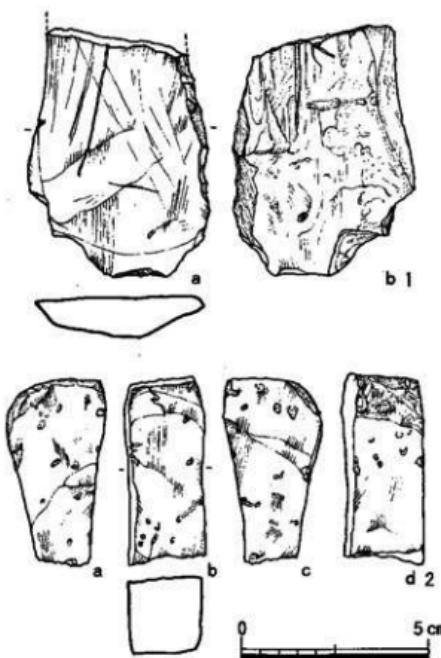
b面は礫面で覆われており、研磨痕はみられない。粒子の細かな石材を利用しており、使用によって生じた擦痕が多く観察される。2は立方体を呈したいわゆる典型的なもので、下半部は折損している。四面を研磨面として利用し、b面とd面は「中くぼみ状」に中央部が細身になっており、これは研磨面の使用頻度によるものと考えられる。

石材は1よりもやや粒子の荒い砂岩質のものと考えられる。

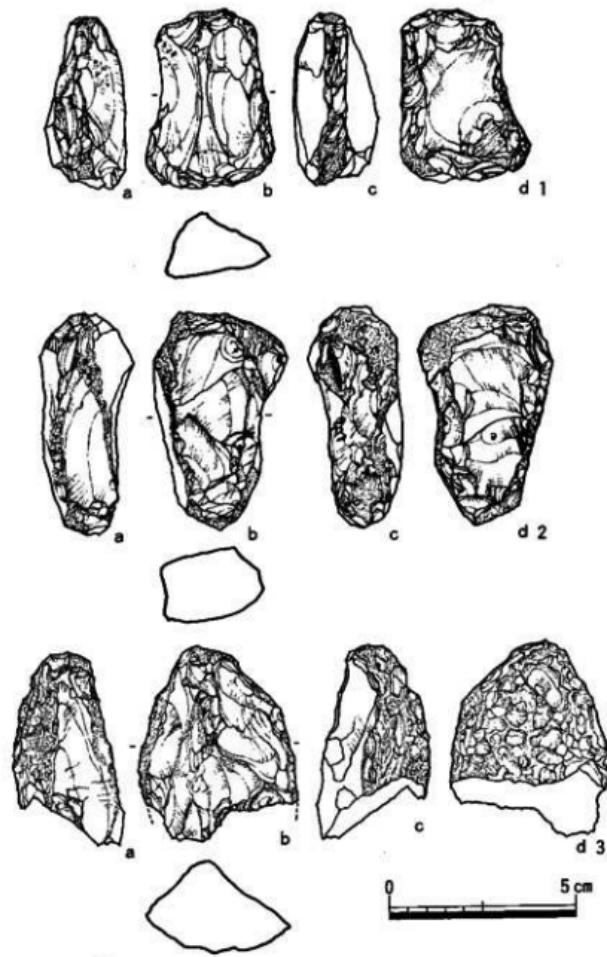
砥石は石材のかたさや粒子の荒さによって「荒砥」「中砥」「仕上げ砥」に分けられるが、本遺跡で出土した砥石がどれに属するかは判明し得ない。また、1は断面の薄さから台上に固定して据え置いて使用されたことが推測され2は砥石自身が小形であることから直接据え置いて使用されたものとは考えられず、1と同様、台上に固定して使用したかあるいは手を持って使用した提砥であると思われる。

なお、1がSD-52上面の包含層、2がSD-52中層下位で出土した。

火打ち石（第25図-1～3） 火打ち石はSD-52で検出され、1・3が中層、2が中層下位で出土した。いずれもサヌカイト製である。出土した3点の火打ち石をみると、①打撃痕が側縁全周を覆うもの（1）（2）と、②打撃痕が側縁全周および後線上にまでおよぶもの（3）に大別できる。これは里中遺跡（田原本町大字小阪所在）より出土した火打ち石も同様である⁶。サヌカイト製の火打ち石は、サヌカイト同士を打ち合わせるよりも、ヒウチガネと呼ばれる金属製（鉄）の板と打ち合わせる方が発火率がかなり高いことが実験により知られており⁷、本遺跡においてもヒウチガネが存在していた可能性が強いと思われる。



第24図 砥石実測図 (S=2%)



第25図 火打ち石実測図 ($S = \frac{2}{3}$)

ここで①②両者の関係を考えてみたい。以前、里中遺跡の火打ち石を報告した際、①は打撃する側、②は打撃される側と考えたが、これはあくまでも石同士を打ち合わせることを前提として考えたものである。ヒウチガネの存在をここで考えるならば、石はすべて打撃されるものとなる。

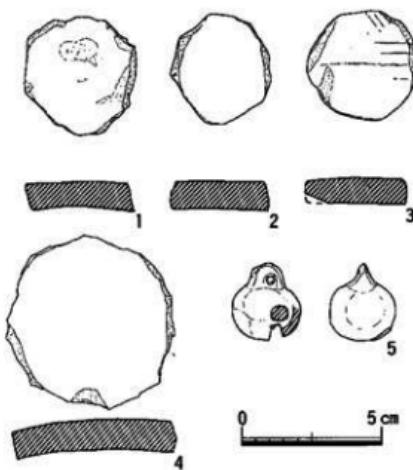
火打ち石は普通、先鋭な稜角を打ち合わせることによって発火することから、当然石の側縁は先鋭な稜角として打撃されたものと考えられる。では②のように後線上にまで打撃が加えられているものはどのように考えられるのだろうか。②の事例で考えられるのは、稜線が稜角としての役割を果たすということである。しかし、1ではb面中央に走る二本の稜線が比較的大きな稜角を有しているにもかかわらず、ほとんど打撃痕が残されていない。ところが3と比較すると、側縁の潰れの状態が3の方が著しく丸味をおびており、稜角が残されていないことがわかる。このことより、火打ち石はヒウチガネによってまず石の側縁を打撃し、稜角がなくなれば稜線にまで打撃がおよぶと考えられる。以上のことから、本遺跡における火打ち石の①②の違いは、石の使用頻度の違いと認識するのが妥当であろう。

土製品（第26図）

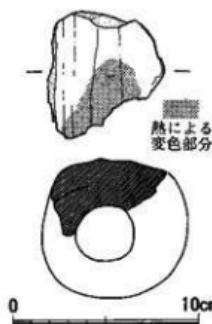
土製円板（第26図-1～4） 土製円板は4点出土した。いずれも瓦器の破片を利用したものである。2と4は大鉢の破片、3は摺鉢の破片と思われる。1～3は直径4cm前後、4は6cm前後にほぼ正円になるように打ち欠いており、二つの大きさに分類されるであろう。1は表面採集によるもの、2と4はSD-52中層出土、3はSD-52上層出土である。本品の性格はわからない。

土鉢（第26図-5） SD-52の第3層より出土したもので、完存品である。ほぼ球形を呈し、上部を扁平につまみ出し、孔を穿っている。紐孔となるものである。球形の体部の下側には長方形の透孔を切り込んで開けている。中空の内部には径5～6mmの粘土の玉が入っており、振るとやや低音ながら良い音色である。器壁は薄く3mm程度である。乳褐色を呈し、精良な粘土を使用している。胎土、焼成とも一部の土師器皿に類似している。

送風管（第27図） 第27図はSD-52中層下位より出土した送風管の破片である。推定直徑7～8cmで、内径3cm前後になるやや不整形な円筒状を呈するものである。丸い棒に粘土を巻きつけて成形したと思われる。外面の一部には熱による変色がみられる。全体には淡褐色を呈し、胎土には砂粒を混在させている。

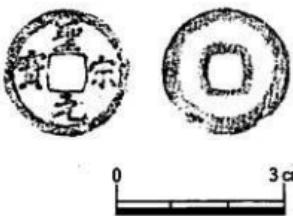


第26図 土製円板・土鉢実測図 (S=3)



第27図 送風管実測図 (S=3)

送風管は1点であったが、鍛冶関係の遺物としては図版20-2にあるような焼土塊（坩堝？）や図版20-3・4のような鐵滓が出土している。



錢貨

聖宗元寶（第28図） 第28図はSD-52の中層より出土した北京錢である。円形に方孔を有するもので、表には「聖宗元寶」と鋳出されている。裏面には文字はない。本銭は建中靖國元年（1101年）に初鋳され、その後崇寧年間にも鋳造されたものである⁹。

第28図 錢貨拓影（S=3分）

自然遺物（図版20-下段）

自然遺物としてはSD-52の大溝より多数出土している。これは溝に自然堆積した遺物で粘土層であったため、残存状況は良好である。図版20の下段はSD-52の中層下位より出土したもので、モモ等の種子類があるが未鑑定である。また、種子類とともに昆虫も検出しており、図版の昆虫はヒラタクワガタであろう。

4. 近世・近代の遺物

近世・近代の遺物としてはSD-01、SD-02の二つの小溝とSE-01の井戸から出土している。いずれも土器を中心で数量は少ない。時期的には江戸時代の末から明治期にかけてのものであろう。

土器

染付茶碗・小皿（図版15-7～12） 図版15-7～11はSD-02より出土した茶碗である。7は小形品で、木ノ葉状の紋様が描かれている。8～10は全体に波紋をあしらい、8では「福」、9では「福寿」、10では「帝国万歳」と紋様間に書いている。11は同様に波紋をあしらっているが、全体には草花を散らしている。やや器壁が前者より厚く染付の色調も深みがあり、やや時期的に古いものであろう。12はSE-01より出土した白色の磁器小皿である。

IV. まとめ

1. 金剛寺遺跡の性格

金剛寺遺跡については、考古学的には全く未知の遺跡といつていいだろう。わずかに金剛寺集落の北方に遺物散布地がみられる程度で、時期や性格について論ずるべき資料がなかった。しかし、小字名や文献史上にみられる「金剛寺」氏や「金剛寺城」〔史料編・史料3～9参照〕が登場していることから、この方面では金剛寺集落周辺にその遺跡があることは推定されていた⁶。今回の発掘調査は小規模であったが、文献史上にみられる「金剛寺」氏関係の諸遺構を検出した可能性が非常に高い。この点において重要な調査であったといえる。以下、調査の結果をまとめ遺跡の性格を明らかにしていきたい。

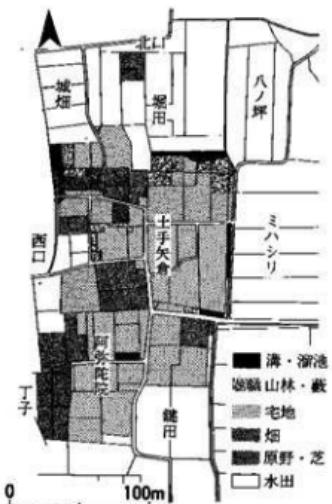
この調査では中世及び近世・近代の遺構・遺物も合わせて検出しており、数時期にまたがる複合遺跡であることがわかった。中世以前のものとしては、弥生時代後期から奈良時代頃までの遺物が数点づつ出土しており、近隣にこの時期の遺跡が存在していたのかも知れない。また、金剛寺集落の北側では平安時代の瓦器片等が散布していることから、しだいに南側へ遺跡が拡大していったようである。

近世・近代の遺構は小溝があり、現在の金剛寺集落に伴うものと考えてよからう。2条の小溝は中世の大溝上に掘削されていることから、中世における地割は今まで残っていると考えてい。このような例は唐古・健遺跡⁷における中世館や十六面・薬王寺遺跡⁸にみられる諸遺構など地割と検出された諸遺構が一致する例が多く、地割からある程度の遺構や遺跡を推定する手段として有効である。今回の金剛寺遺跡においても第29図のような地割を示しており、第3図にみられる小字名と合わせて遺跡地が推定できる。地割は一辺10～30mの正方形や長方形の区画と一辺100mもある細長い長地型の二者に分けられる。後者は水田地域と思われる。これに対し前者は、現在水田になっているところもあるが居住区と考えてよからう。そして、この境には濠がめぐらされ、現在も金剛寺集落の東側と東北側に一部残っている。このような地割ラインと小字名から推定すると、小字名の「北口・城畑・堀田・西口・土手矢倉・阿弥陀院・健田」が中世における遺跡の範囲と思われる。また、金剛寺領内において同様の地割を示すものとして小字名の「ドテマエ」がある。これについては江戸時代の享保九年（1724）に出屋敷として記されているものがそれであろう〔史料編・史料10参照〕。以上のような状況から判断すると中世の後半に登場する「金剛寺」及び「金剛寺城」は当地に比定されよう。では、発掘調査で検出された諸遺構はどうであろうか。

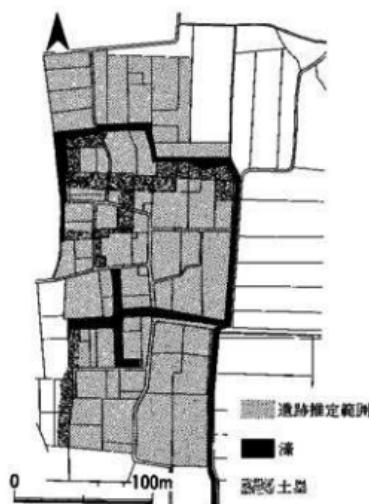
今回の調査は城内のほぼ中心部と思われるところを調査した。小規模な面積であったため、各遺構の規模は明らかにできなかつたが、幅9m前後の人の為的な大溝（濠）を検出した。東西及び南北に走向していることから、城内を区画する溝と考えられる。この区画する溝と地割から推定すると一辺25m前後の屋敷地が導き出される。この屋敷地内部は調査できなかつたが、溝の内部に廐棄されている人頭大の石を考慮すれば、礎石をもつ建物が考えられる。また、出入口の一つ

として南側の東寄りに橋がかけられていた。さて、大溝の時期であるが、15世紀の後半から16世紀中頃の時期で、大溝の上層は意識的に埋めたと考えられる。この上層には前に述べた礎石らしき石が多数含まれていた。大溝内より出土した遺物は大半が日常雑器であった。しかし、これらの遺物群の中には土器の破面まで煤の付着がみられるものが多く、注目される。これが文献にみられる金剛寺城の破却（史料編・史料9参照）（1562）とするには心許無いが、時期的に合致する点は注目したい。また、これに続く江戸時代前半期の遺構・遺物が未検出である点はこの説を補強するものかも知れない。大溝埋没後に洪水堆積物があり、一時期断絶があるようである。したがって、現在の金剛寺集落と中世の諸遺構とは直接つながらないと思われる。

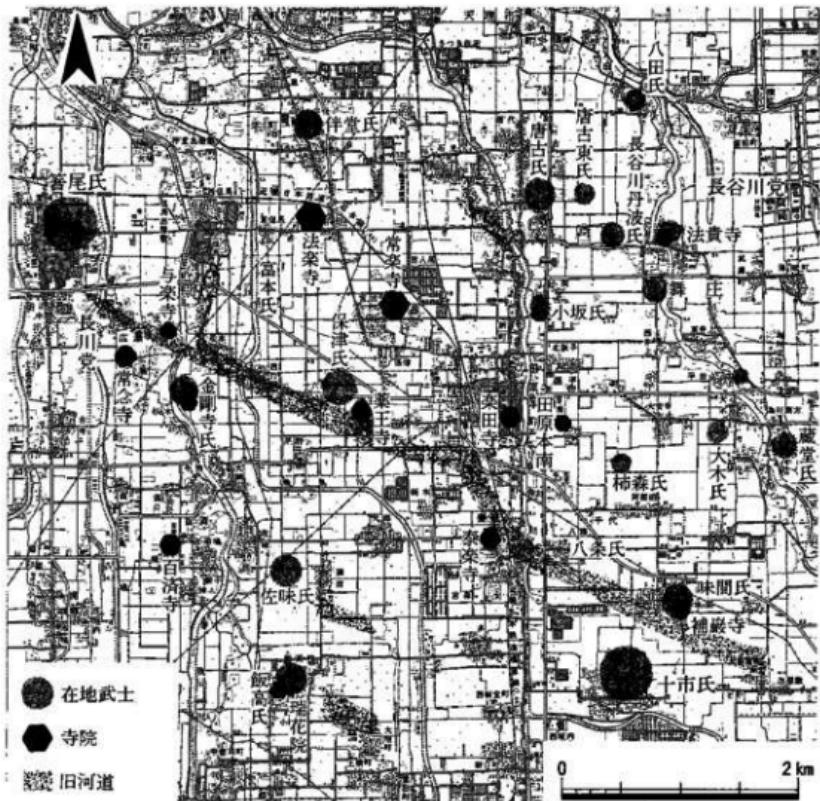
遺物としてもう一つ注目されるものに木製の卒塔婆がある。これはSD-52の大溝の橋脚ちかくから出土したものである。従来、中世の諸遺跡から出土しているものに比べてかなりの大形品で、表に記されている墨書きも類例がなく、その用途については明らかにできない。しかし、このような遺物の性格から推察すれば、寺院に伴っていた可能性が高い。寺院関係遺物はこの他ではなく、積極的に論は進まないが、調査地の南側には「阿弥陀院」という小字名も残っており、また、現在の金正寺境内地にも中世末期の五輪塔の残欠（史料編・金石文1参照）が多数存在することから、城内の一画に寺院が存在していたとも考えられる。これは金剛寺氏の氏寺的なものであろうか。第31図の分布図にみると長谷川党や小坂氏、飯高氏などは寺院を伴う遺跡といえよう。なお、この金剛寺氏の寺院名については明らかにし得ないが、明治7年に廢寺になった



第29図 遺跡周辺の地割と地目



第30図 推定される遺跡(城)の範囲と溝・土塁



第31図 15~16世紀における在地武士及び寺院の分布図

「阿弥陀寺」〔史料編・史料13参照〕が注目される。本寺の場所は定かでないが、調査地の南側の小字名が「阿弥陀院」であり、当地に存在していた可能性が高い。前述の金正寺には阿弥陀寺の旧仏として伝わる南北朝時代の阿弥陀如来立像がある。本寺の創建年代も明らかでないが、状況的には中世末期に存在していたと考えられ、調査で検出した木製卒塔婆は本寺に関係したものであろうか。

以上、発掘調査の成果と文献史料との関係について述べてきたが、考古学的な成果は文献にみられる「金剛寺城」には確定できるものと思われる。では、金剛寺城の構造はどのようなものであろうか。遺跡周辺の地割と地目（第29図及び巻頭図版）から濠と土塁を推定してみた（第30

図)。遺跡の北端にあたる「城畠・堀田・北口」については定かでないが、これを含めると城の規模は南北300m、東西100~130mを測る大規模なものとなる。このような形態をとるものとしては十六面・薬王寺遺跡や唐古・健遺跡、法貴寺丹波山遺跡などがみられる。東側と北側は比較的良く濠が残っており、濠の内側には土壘状のものがあったと思われる。この土壘は地目において山林や藪となって残っているが、それ以外においても畠などの地目を合わせてみるとならば土壘は連続していく。土壘や濠は城内部を区画するように伸びており、多数の小区画に分かれていたと考えられよう。城の中心は「土手矢倉」で、北側の防御は濠や土壘によって強固であったと思われる。また、城の南半には規模はわからないが寺院が存在し、城と寺院が対になっていたと思われる。金剛寺城の概略的な構造について述べてきたが、今後、発掘調査によって検証していく必要がある。

2. 金剛寺遺跡と周辺の中世遺跡

文献史上に登場する金剛寺氏は長河庄の公文職をつとめ〔史料編・史料5参照〕、長河庄の執行職・檢断職であった箸尾氏につぐ有力な在地武士であった。15~16世紀の大和には筒井氏・十市氏・箸尾氏・越智氏等有力な国民・衆徒が分割、支配していた。國中における有力武士の関係は第31図のようになる。箸尾氏は広陵町東部から田原本町西部にひろがる長河庄の中心的武士で、同庄と関係する在地武士で長川党を結成していた。この長川党下には金剛寺氏や佐味氏が含まれており、第31図にみると旧河道沿いに分布していることがわかる。これに対し、上流域には十市氏が領していた。この十市氏下には味間氏、八條氏などがあり、田原本町の南東部から櫛原市北部を中心としていた。この箸尾氏・十市氏の流域に対し、初瀬川流域には法貴寺一党を中心とする長谷川党が結成されていた。この中には唐古氏や小坂氏などが含まれていた。長谷川党下の諸氏の分布状況をみると、初瀬川の旧河道は田原本町東井上から三宅町石見方面へ流れていた可能性がある。各党の集団は莊園を中心とするものであるから、各流域ごとの結合が重要で、また、交通手段としても河川を掌握する必要があったと思われる。

箸尾氏と金剛寺氏の結合は現在、萬城川と曾我川の二条の河川によって隔てられているが、今なお、金剛寺集落の墓は広陵町廣瀬に所在する常念寺(箸尾氏の氏寺)にあり、また、この常念寺の末寺として阿弥陀寺(廢寺)が存在していた。このようにみてくると、箸尾氏と金剛寺氏間の自然堤防は旧河道であった可能性が高く、地理的な結合は強固であったと思われる。また、金剛寺氏とともに登場する佐味氏の遺跡(佐味城)は現在の佐味と満田の集落間にあった可能性が高い。このような遺跡の間隔は1~1.5km前後にあり、一在地武士の掌握範囲を示しているようにも思える。

以上、簡単ではあるが、文献史上に登場する在地武士を國中の中心部においてみてきた。これらの在地武士は一乘院、大乘院方の国民・衆徒として活躍しながらも、莊園を中心にして河川を媒介として固い地域的結合の上に集団を形成していたと考えられる。上記の遺跡を含めた、中世の遺

跡は現在の集落の下に存在しているものが多く、遺跡の内容を明らかにできないものもあるが、今後地理的な研究を含め、注意していく必要があろう。

- (注) ①小島俊次「文化の黎明」『平野村史』平野村史編纂委員会編 1962
- ②櫛原考古学研究所編『十六面・渠王守遺跡発掘調査概報』(『奈良県遺跡調査概報1981年度』) 1983
- ③藤田三郎「考古学からみた歴史時代」『田原本町史 本文編』田原本町史編さん委員会編 1986
- ④池田末利・横田健一監修『若尾城』『奈良県の地名』(『日本歴史地名大系30』) 平凡社1981
- ⑤廣吉壽彦先生に卒塔婆の墨書きを判読して頂いた。記して感謝します。
- ⑥田原本町教育委員会編『小坂里中古墳・里中遺跡発掘調査概報』(『田原本町埋蔵文化財調査概要5』) 1987
- ⑦岩城正夫「原始時代の火」新生出版 1979
- ⑧奈良県立橿原考古博物館編『大和考古資料目録 第2集 郡藏古銭資料』1973
- ⑨-a. 広瀬瑞弘「中世の名主、土豪とその後」『平野村史』平野村史編纂委員会編 1962
-b. 朝倉弘「在地武士」『田原本町史 本文編』田原本町史編さん委員会編 1986
- ⑩唐古・鍵遺跡では第8次・11次・14次・16次・19次・20次・22次・26次・31次の各調査で中世の遺構を検出している。
-a. 櫛原考古学研究所編『唐古・鍵遺跡第6・7・8・9次発掘調査概報』田原本町教育委員会 1980
-b. 櫛原考古学研究所編『唐古・鍵遺跡第10-11次発掘調査概報』田原本町教育委員会 1981
-c. 田原本町教育委員会編『昭和57年度 唐古・鍵遺跡第13・14・15次発掘調査概報』(『田原本町埋蔵文化財調査概要1』) 1983
-d. 田原本町教育委員会編『昭和58年度 唐古・鍵遺跡第16・18・19次発掘調査概報』(『田原本町埋蔵文化財調査概要2』) 1984
-e. 田原本町教育委員会編『昭和59年度 唐古・鍵遺跡第20次発掘調査概報』(『田原本町埋蔵文化財調査概要3』) 1985
-f. 田原本町教育委員会編『昭和60年度 唐古・鍵遺跡第22・24・25次発掘調査概報』(『田原本町埋蔵文化財調査概要4』) 1986
-g. 田原本町教育委員会編『昭和61年度 唐古・鍵遺跡第26次発掘調査概報』(『田原本町埋蔵文化財調査概要5』) 1987
- ⑪注⑩と同じ。

(参考文献)

田原本町史編さん委員会編『田原本町史 本文編』 1986

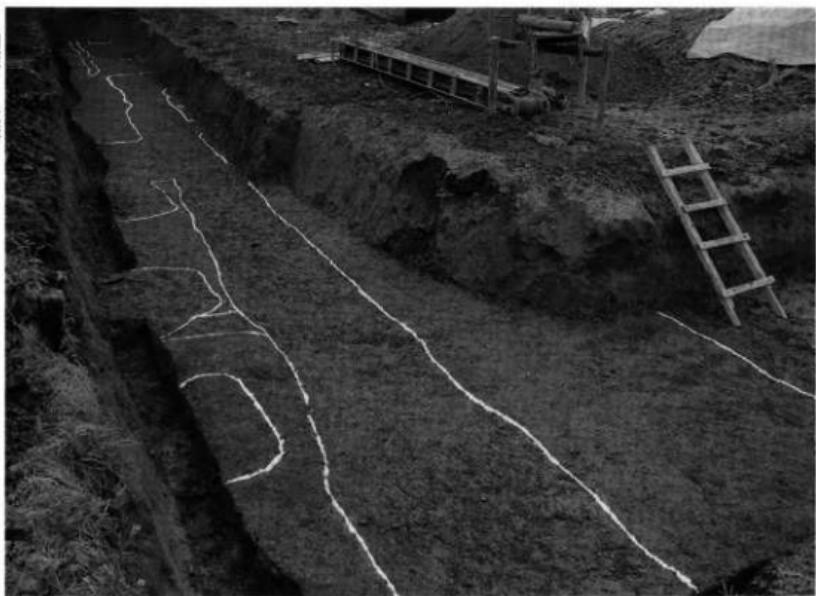
図 版



a. 遺跡遠景（北西から）



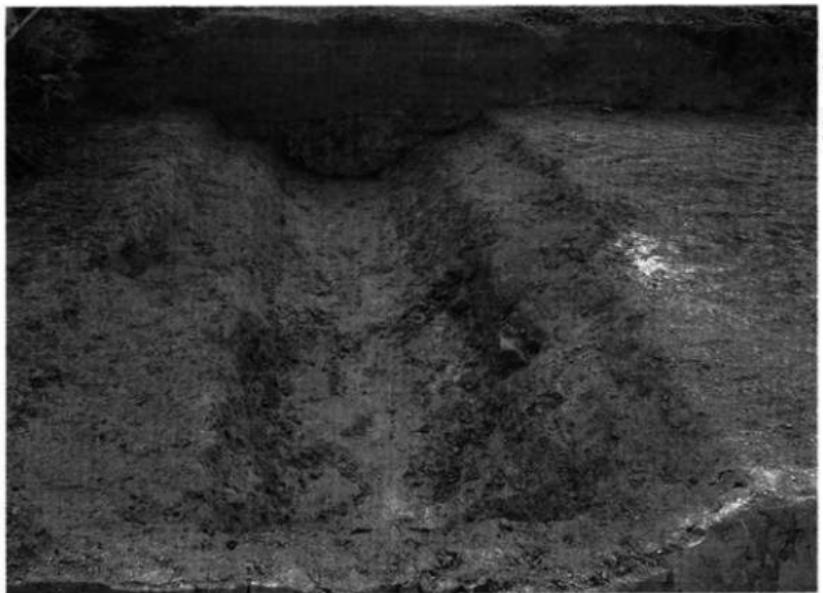
b. 調査前の状況（東から）



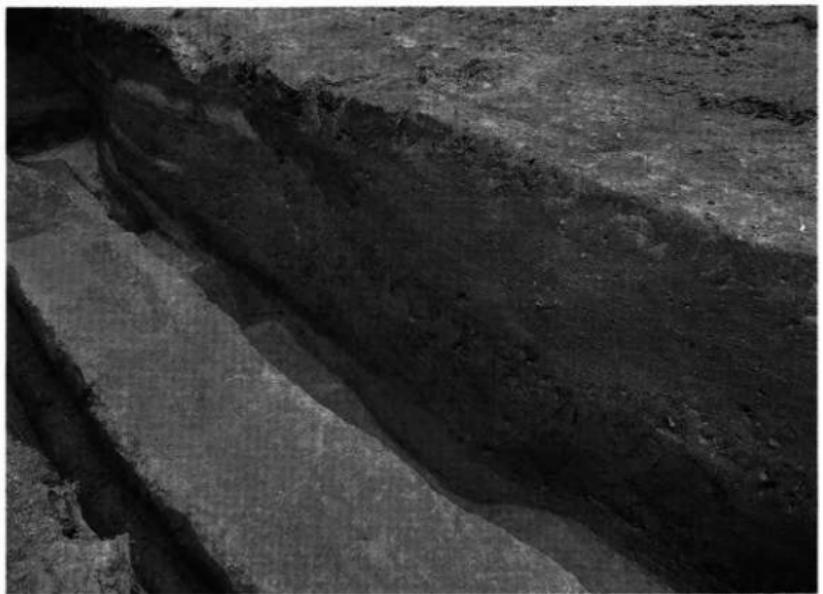
a. 近世・近代遺構検出状況



b. 近世・近代遺構完掘状況



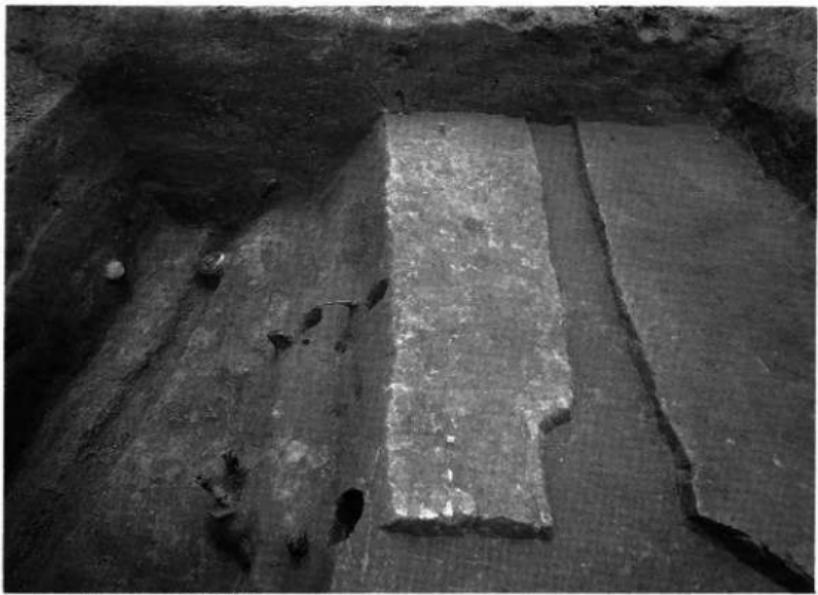
a. 拾張區 SD—01完掘狀況



b. SD—02 · 53土層堆積狀況



a. SD—52完掘状况



b. 拓张区 SD—52完掘状况



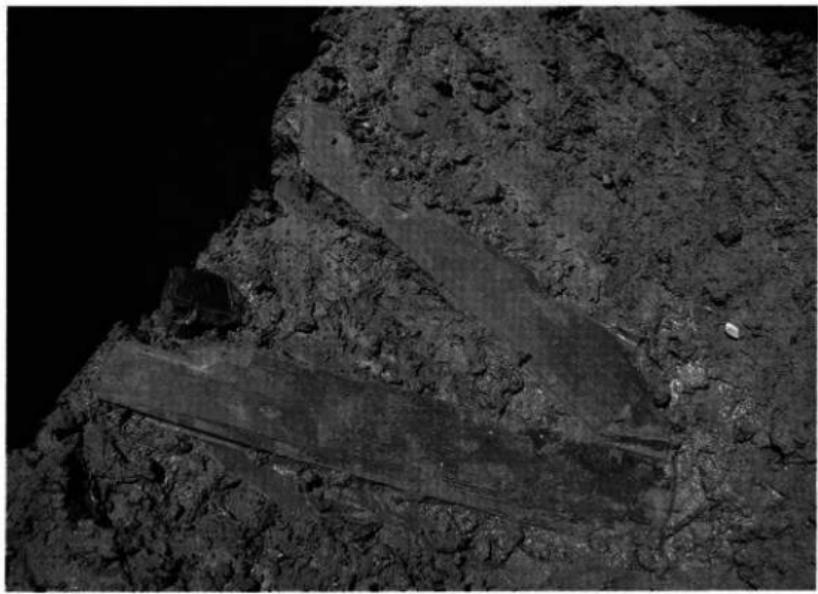
a. 拓张区 S D—52桥脚检出状况



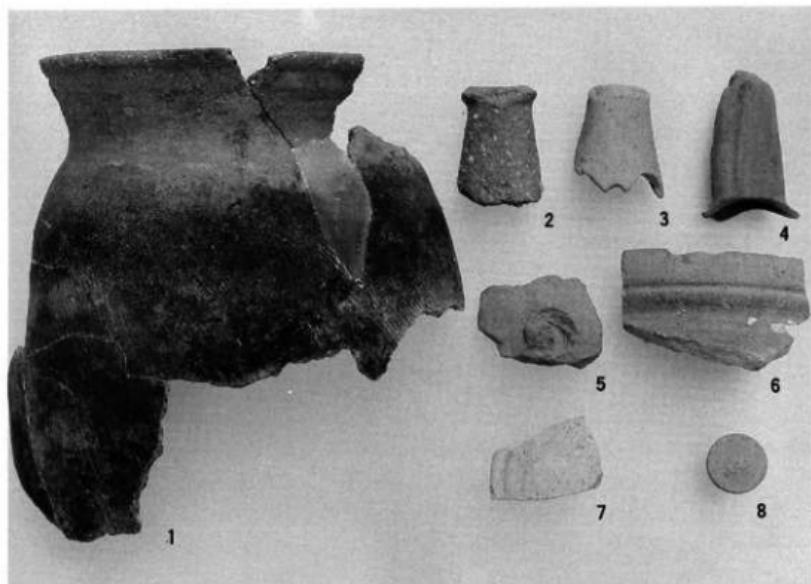
b. 拓张区 S D—52桥脚检出状况



a. SD—52遺物出土狀況



b. 括張區 SD—52木製卒塔婆出土狀況



1・4・5. 土師器, 2・3. 弥生土器, 6～8. 須恵器

1—SD—52下ベース砂層, 5・6—SD—52中層, 2～4・8—SD—52中層下位, 7—SD—52上層



SD—52 出土中世雜器



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14

1~14. 土師皿 1—SD—52中層下位, 2~4·7·11·12·14—SD—52中層,
5·6·9·10—SD—52下層, 8·13—SD—52上層



3

1 ~ 3 . 土師器羽釜
1 · 3 — SD—52下層, 2 — SD—52中層下位



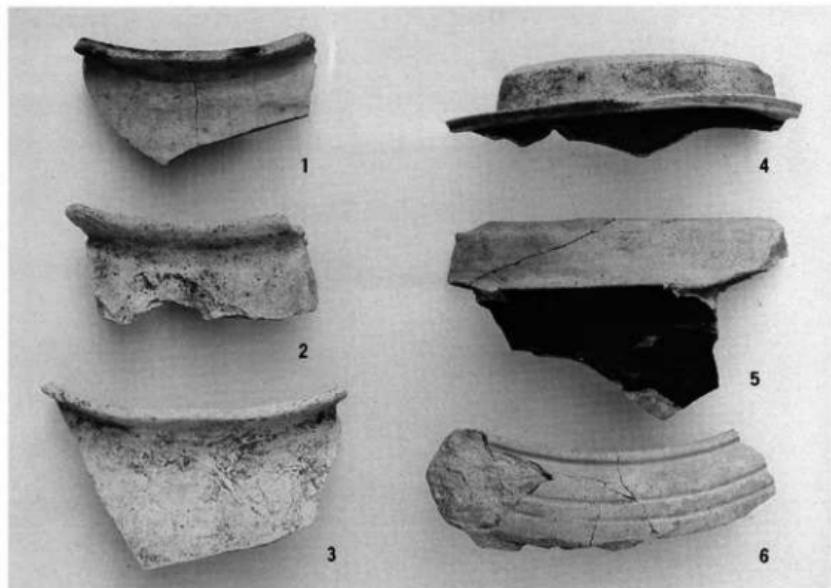
1

1. 土器羽釜 SD—52中層下位

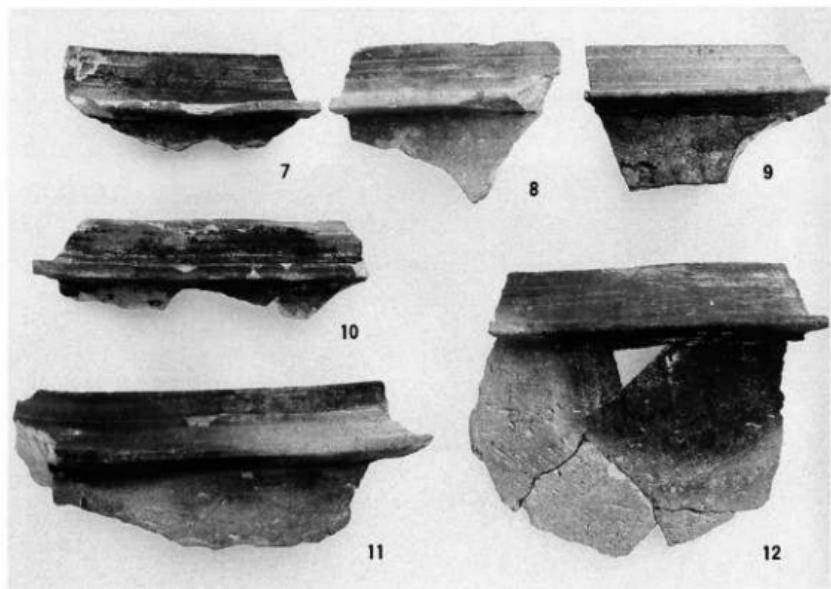


2

2. 瓦器羽釜 SD—52中層下位



1~6. 土師器羽釜
1—SD-52下層, 2·3—SD-52上層, 4~6—SD-52中層下位



7~12. 瓦器羽釜
7~9·12—SD-52下層, 10—SD-52中層下位, 11—SD-52中層



1

1. 瓦器摺鉢 SD-52中層



2

2. 瓦器摺鉢 SD-52下層

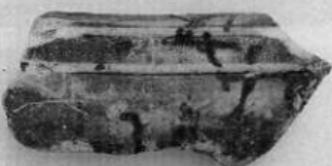


1

1. 瓦器鉢 SD-52中層・下層



2



6



3



4

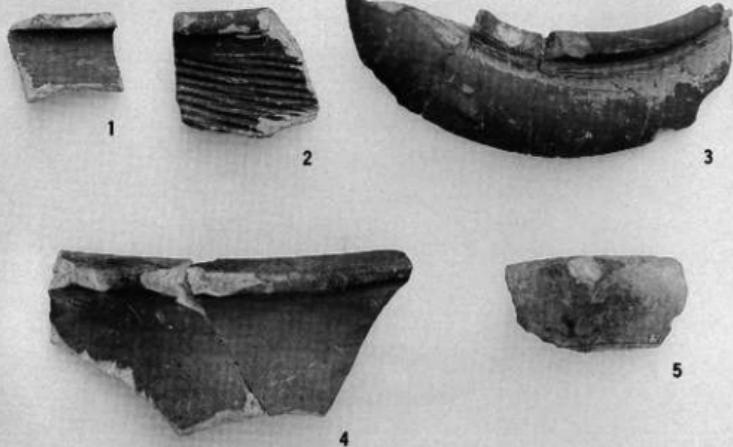


5



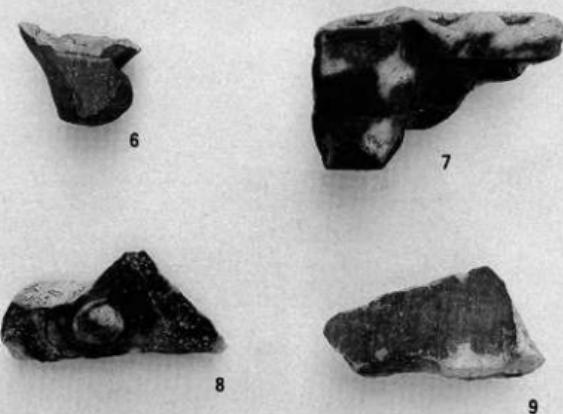
7

2. 瓦器鉢, 3~7. 瓦器火舍, 2—SD-52上層, 3—SD-52上層, 4—SD-52中層下位,
5—SD-53上層, 6—SD-51, 7—SD-54中層



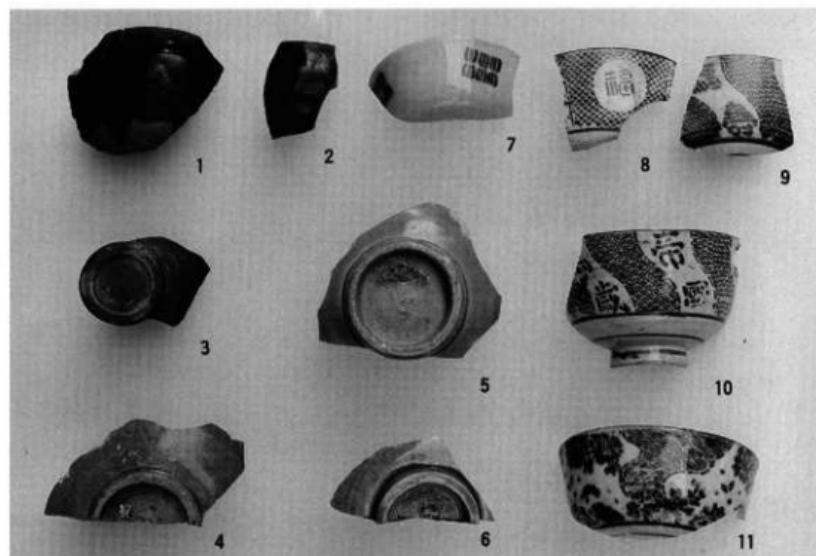
1・2・4. 瓦器甕, 3・5. 瓦器火舍

1・3・4—SD-52中層下位, 2—SD-52中層, 5—SD-54中層

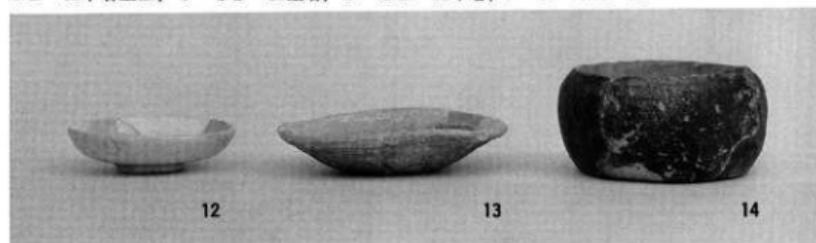


6～9. 瓦器火舍・鉢の脚部。

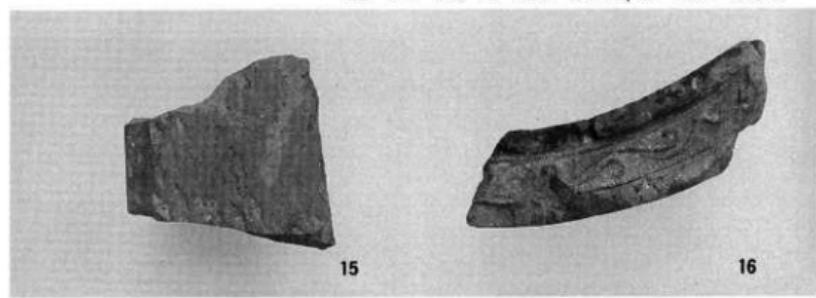
6—SD-52中層下位, 7—SD-52上層, 8—SD-52下層, 9—SD-52中層



1~3. 天目茶碗, 4~6. 青磁, 7~11. 染付茶碗 1·2—SD-52中層, 3—SD-52中層下位,
4—SD-52中層上位, 5—SD-52上層, 6—SD-52下層, 7~11—SD-02



12. 磁器小皿, 13. 施釉小皿, 14. 瓦器小壺
12—SE-01, 13—SD-52下層, 14—SD-52中層



15. 平瓦, 16. 軒平瓦
15·16—SD-52中層



赤外線写真による文字部分

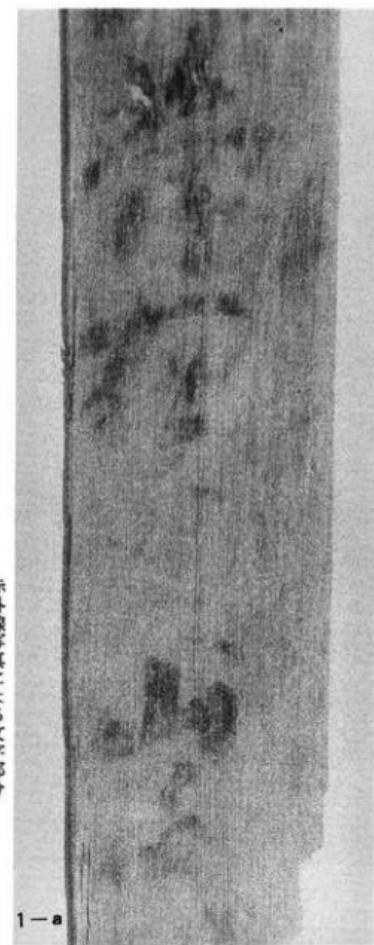
1-a

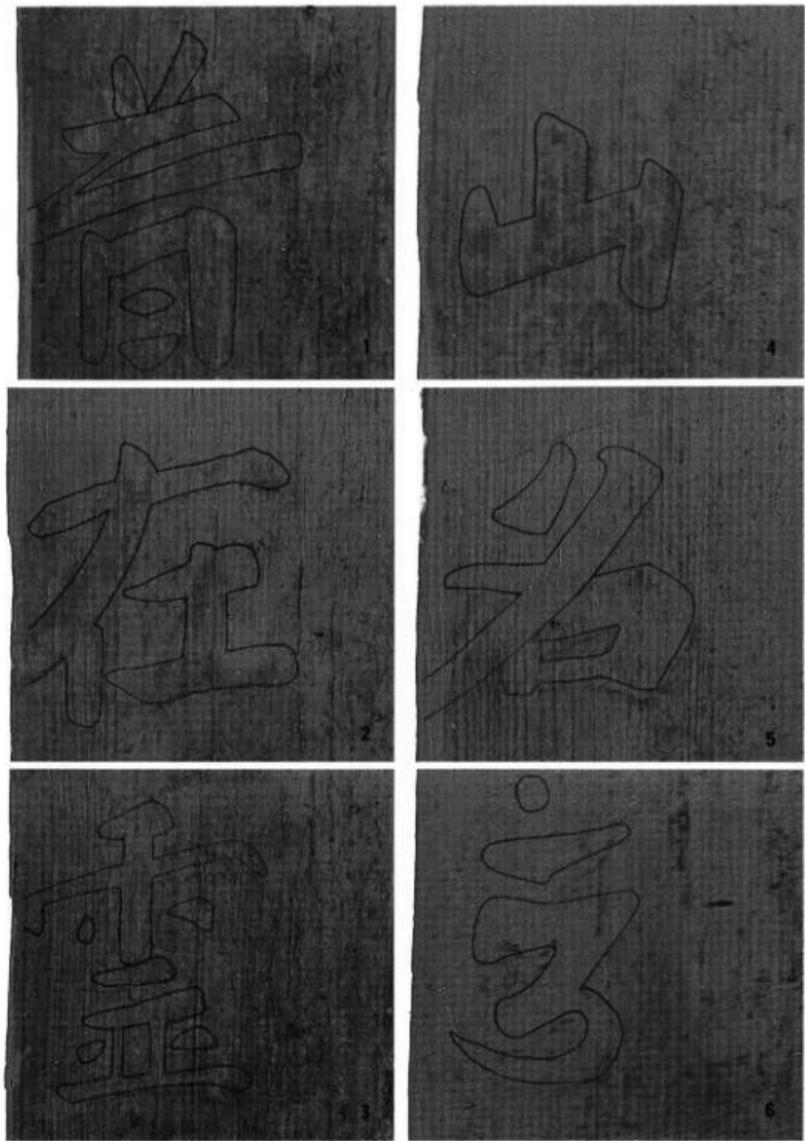
1-b
水銀

1-a
水銀

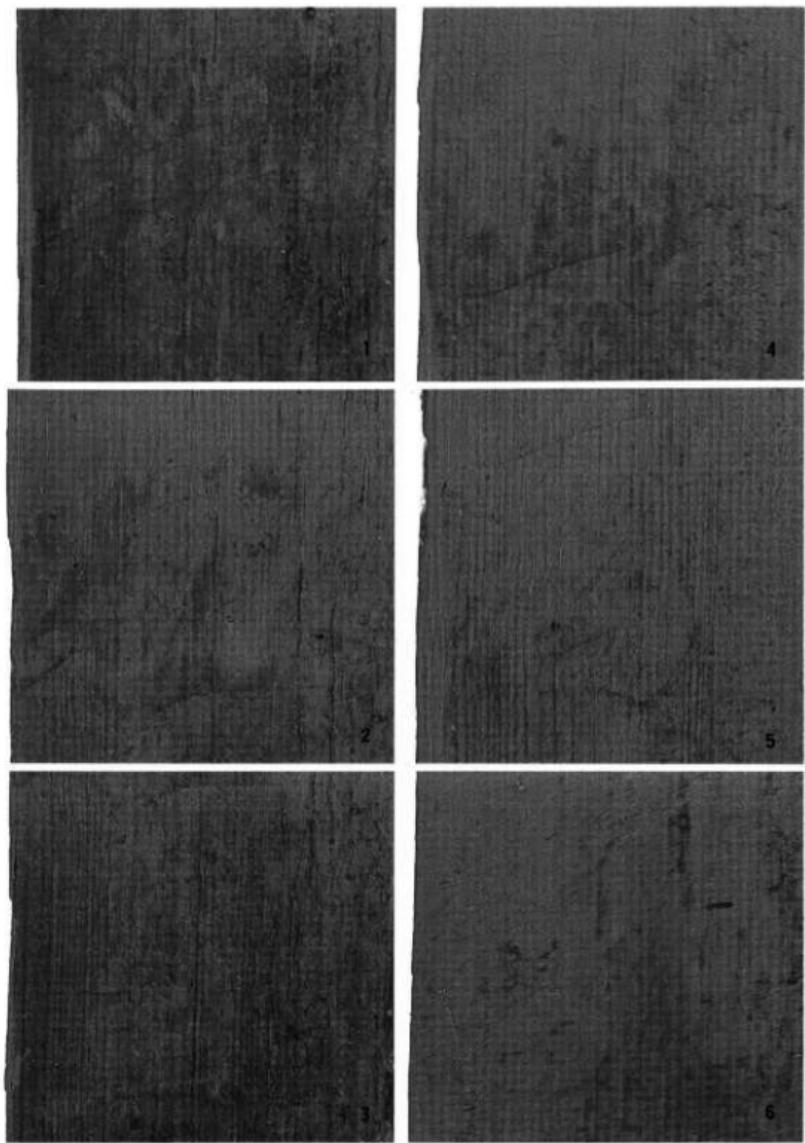


1 壁面吹き出し
C75
cavetto

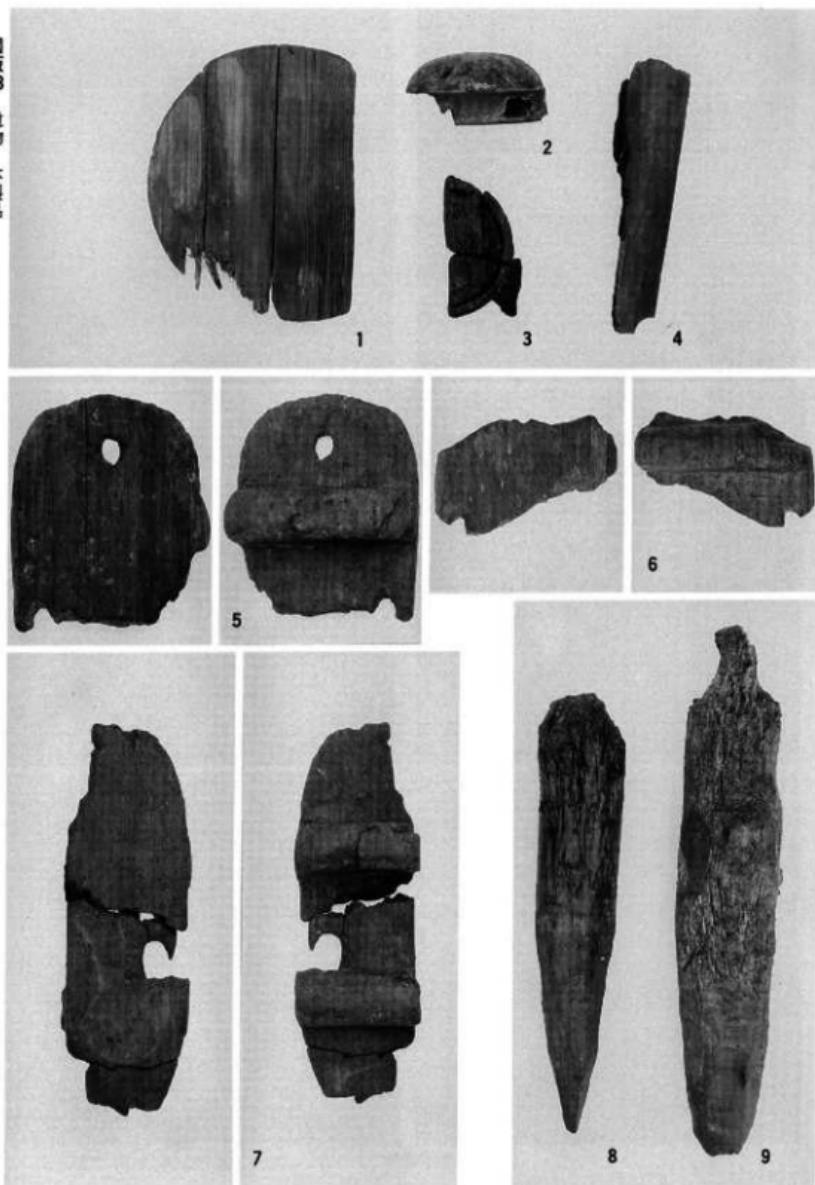




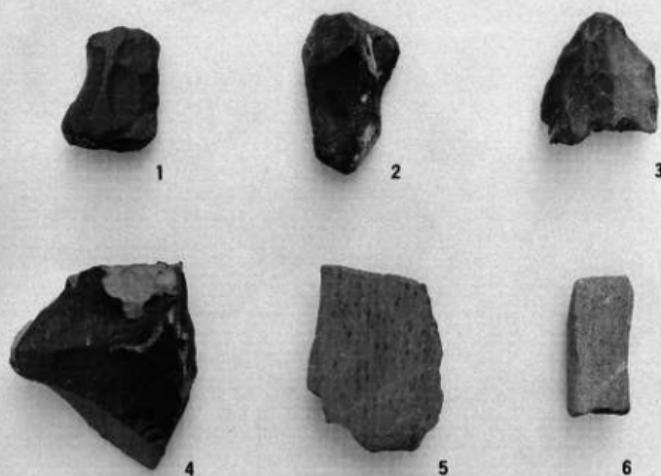
木製卒塔婆 1～5.a面文字部分、6.b面梵字部分



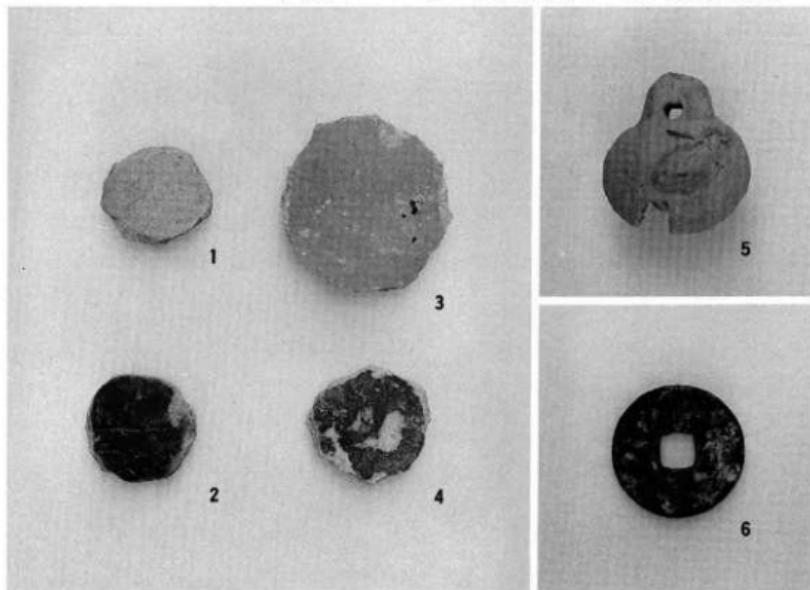
木製卒塔婆 1~5. a面文字部分、6.b面梵字部分



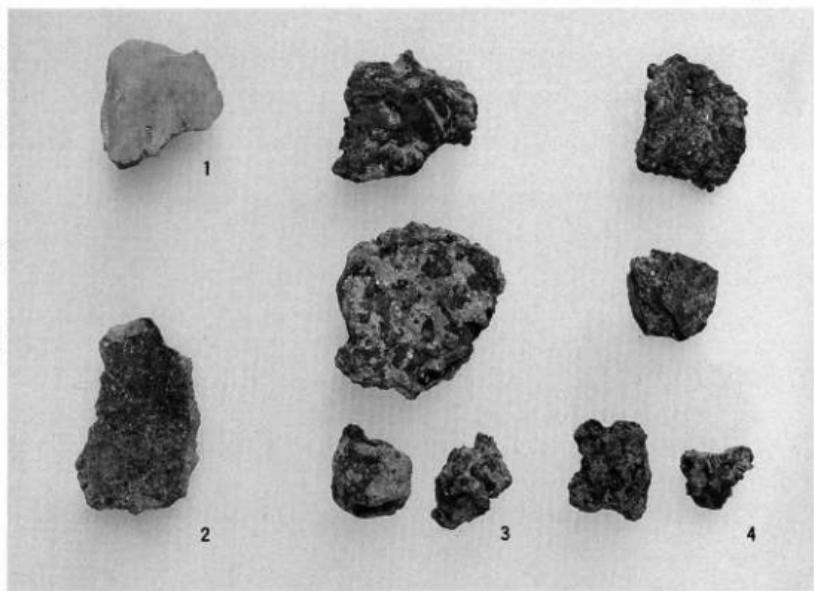
1.曲物底板，2.漆器蓋，3.漆器椀，4.羽子板，5~7.下駄，8·9.橋脚。
1·3—SD-52中層，2·4·6—SD-52中層下位，5·7~9—SD-52下層



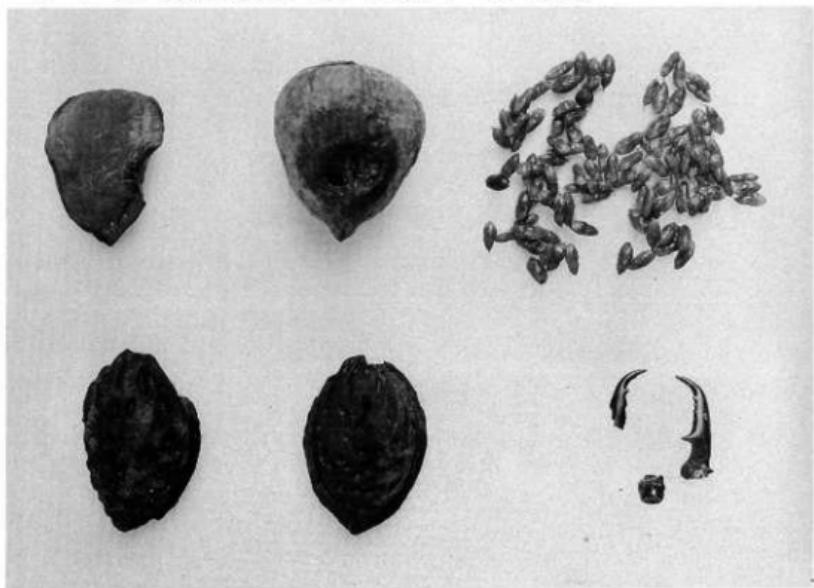
1～4. 火打ち石, 5・6. 砥石,
1・3・4—SD-52中層, 2・6—SD-52中層下位, 5—SD-52上面包含層



1～4. 土製円板, 5. 土鉗, 6. 錢貨,
1・3・6—SD中層, 2—SD-52上層, 4—表採, 5—SD-52下層



1. 送風管, 2. 烧土塊, 3・4. 鐵滓,
1・2—SD-52中層下位, 3—SD-52上層, 4—SD-52下層



SD-52中層下位出土種子及び昆蟲

金剛寺遺跡

— 史 料 編 —

目 次

史料1	太政官符案（永延三年）	1
史料2	官宣旨案（保元三年）	2
史料3	長川流鋪馬注進日記写（至德元年）	2
史料4	「大乘院寺社雜事記」（康正三年）	2
史料5	「桑院坊人用錢支配狀（忍水二十七年）	3
史料6	「大乘院寺社雜事記」（文正元年）	4
史料7	「大乘院寺社雜事記」（文明七年）	4
史料8	「大乘院寺社雜事記」（文明十四年）	4
史料9	「城南行錄」（永保二年）	5
史料10	和州御領鄉鑑（享保九年）	5
史料11	淨照寺末寺由緒書抄（寛政元年）	5
史料12	「大和國町村誌集」（明治十四年）	6
史料13	金正寺寺院明細帳（明治二十四年）	7
史料14	「蓮門精舍舊聞」第六冊（欠年）	8
金石文1	五輪塔（元龜元年）	8
金石文2	背光五輪板碑（江戸時代中期）	9
金石文3	石燈籠（文化二年）	9
金石文4	狛犬（天保十四年）	9
金石文5	金正寺木造阿弥陀如來立像（欠年）	10

例 言

- 一、本稿は、大字金剛寺に関する史料を収録したものである。なお、金剛寺領内に存在する金石文も併せて収録した。
- 二、史料は、文書・金石文の順にし、年代順に配列した。
- 三、各史料の番号の下には、史料名・底本とした刊本の叢書名を掲げた。
- 四、判読不能の箇所は、□・□で表した。
- 五、史料の編集解説は沢井利夫があたった。
- 六、史料の一部は町史編纂史料を参考にした。

史料1 太政官符案 色川本榮山寺文書

(平安造文) 一一三三三号)

太政官符大和國司

應任公驗水令領掌榮山寺田畠等事
十市郡棚町參段陸拾步 四至
東北限野畔 南限朝西畔
西限御河 北限近江河

西十六條五里七坪一町

八坪一町 十七坪一町 十八坪一
町 十九坪一段 廿坪一百卅步

十七條五里十一坪一町

十二坪一町 十三坪一町 十四坪一町

廿三坪三百步 廿

四坪二百卅步

西十六條五里七坪一町 八坪一町

十七坪一町 十八坪一町

十九坪一段 廿坪一百卅步

廿三坪三百步 廿

四坪二百卅步

西十六條五里七坪一町 八坪一町

十七坪一町 十八坪一町

十九坪一段 廿坪一百卅步

廿三坪三百步 廿

四坪二百卅步

西十六條五里七坪一町 八坪一町

十七坪一町 十八坪一町

十九坪一段 廿坪一百卅步

廿三坪三百步 廿

四坪二百卅步

西十六條五里七坪一町 八坪一町

十七坪一町 十八坪一町

十九坪一段 廿坪一百卅步

廿三坪三百步 廿

(中略)

左少辨正五位下源朝臣姓氏不詳 右大史正六位上尾張連判

永延二年四月廿六日

奉行 同年五月廿五日

守藤原朝臣判

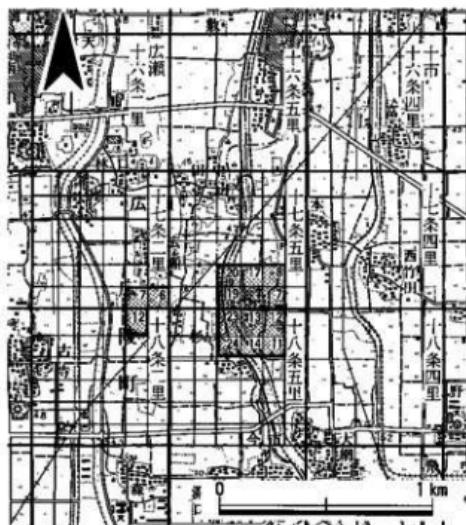
字智郡奉行

行事内判

〔解説〕

金剛寺に関する最古の文献である。平安末期の永延二年(九八九)には、その条里により、当町金剛寺辺りに比定され、遠く榮山寺領(現五條市榮山寺)の飛び地であった。その領地は、保元三年(一

五一)まで存続しているようだが(史料2)、以後不明となる。
また、その領地の西・北側には、川が流れていることもわかる。



第1図 榮山寺領田畠位置図

史料2 官宣旨書 色川本榮山寺文書

(平安道文 六一九三六号)

左辨官下太和臣
應任度度官符、令榮山寺領掌宇智・十市・廣湯等郡田地事、

可令榮山寺領掌者、永延三年正月廿六日同符云、尚侍藤原船子施
入十市郡田地捌町參段陞拾步、
少辨平朝臣判

(中略)

保元三年七月廿八日 大史小機宿禰判

史料4 「大乘院寺社雜事記」康正三年四月廿八日条

一一乘院家御坊人名字依次有記之、

筒井龍田 山田 同成亥 戸井 菅田 樂原 小南 高
嶋 杉本東 六条 岸田 唐院 秋篠尾崎 同南 鷹山奥
小泉次郎 池田下司 郡殿東下司 同西下司 幸前下司 木
津執行 以上衆徒分

越智 布施 万歳 策尾 局田 畠 片岡 細井戸 金剛寺
佐味 中村 布施 捜戸 羅 榎原 脇田 吐
下司 同室 見塔院 法花寺奥 瓜生 北院 大安寺向 箕田 奄
字賀尾 策尾大門 畠今井 万歳南 同北井 以上國民

一大乘院家坊人名字、

古市 小泉 同尾崎 番条 丹後庄 松立院 知足院 稲田
江堤 大西 大仏供 賀留 十市 味間 木原 同尾崎 番条 丹後庄
松塚 土庫 吉備 池内 安部 放野 志賀 佐味 高瀬
迎田 小林 郡山 超昇寺 山陵 狹川 深川 平清水 長谷
椿尾 小藏 助命 山中 丹生 柳生

事に記された顧主人の地侍を列記したものである。当町域には、金
剛寺氏を始め、長谷川党・唐古・大木・味間・佐味の諸氏があげられて
いる。

〔解説〕

至徳元年（一二三八四）、春日若宮祭の時に演じられる流鏑馬の神

〔解説〕

一般的に在地武士を「國衆」と呼ぶが、当町域内においては、金剛寺・佐味氏は「衆院側」の国民であり、大衆院側として、衆徒に井上氏・八田氏・長谷川一党・糸井庄衆は国民であつたことがうかがえる。

史料 5

一条坊人用錢支配狀 応永二十七年（一四二〇）

（天理大学附属図書館 保井文庫）

十五貫文金剛寺

長河庄公文稟 竹田名九町八段但無免穀供米 四番大粒若米段米 青
糸、為重名七町七反同上、調子名宅町同上、沢松名五町同上、

三貫文佐 味
長川庄之内自名兩々在之、

（中略）

（前略）

（後略）

〔解説〕

金剛寺氏は、鎌倉時代以来長河庄（著尾氏を盟主とする）の公文職を努め、竹田・為重・調子・沢松名の二十三町五反を給分としていた有力な地侍であった。また、佐味氏は長河庄の二ヵ名の地侍であった。

史料 6 「大乘院寺社雜事記」文正元年十月十七日条

一昨日自畠山衛門佐方、布施高田兄弟賣落了、越智勢以下當國之
輩相加云々、没落衆等悉以入著尾城了、筒井同入著尾云々、所々
放火以外次第也、金剛寺福塚打死、越智方二小鳴打死了、布施
寺号無事燒失、可歎々々、名木松炎上云々、

史料 7 「大乘院寺社雜事記」文明七年六月八日条

一今日万歳之城二押寄、自城打出致合戦、寄手不知其數打死云々、

筒井舜覺房被迫越于河内城、以外次第散々事云々、自身及生涯
歎之由難記在之所詮一族分物共大略被打死云々、第一福住必定、
著尾一族無所殘打死了、新中高田金剛寺寺松ホツ
興西富本大門

〔解説〕

応仁の乱の発端となる河内の守護であった畠山氏の内訌（畠山義
就と政長の争い）に大和の国衆らは、ふたてに分かれ加わった。
この時、金剛寺氏は政長方に加担し、討死している（史料5）。また、
応仁の乱の終末期にも、著尾氏一族が討死し、保津金剛寺・富本の
諸氏の名前もあげられている。

史料 8 「大乘院寺社雜事記」文明十四年十二月三十日条

河内引汲衆

越智父子、同鳥屋高田万歳吹田

南郷俱志ラ立野兩方龍田戒重

小泉兩方権本兩方庭田兩方濱川豊田

郡山中古市山田兩方多田

大和衆官領方引汲衆人

筒井今市新丹後庄小南市本辻子

小林瓜生北院松立院郡山辰巳

萩別所山田城櫻原

吉備

相谷飯高七条野與白土

十市多々八田新智

出雲中

柏原高田布施田原本南長谷川黨

著尾金剛寺小山戸小夫福住福智堂

高橋興隆寺木津執行佐川番条

典川

笠置越昇寺秋篠坂上向

（後略）

〔解説〕

文明九年（一四七七）に応仁の乱が終結され、大和の在郷武士た
ちも牢人として名を挙げられている。当町域内には、八田・田原本
南・長谷川一党・金剛寺の諸氏が牢人となつた。

永祿二年、七月十五日、箸尾爲網入城、八月十日、松永彈正爲二大
將三好數和州亂入、筒井十市萬歳没落、越智出張、
四年、南都宿間寺破壊造レ城了、松永彈正少源沙ニ汰之、
五年、三月五日、於二泉州二三好實休討死、人衆二千餘死、五月廿
日、於二河州教興寺一合戰、湯河宮内大輔討死、根來寺衆已下千餘
人死、同廿六日、矢田寺悉放火畢、七月十六日、伴當金剛寺兩城破
却畢、箸尾ヨリ沙ニ汰之、箸尾城再進

(後略)

〔解説〕

永祿二年(一五五九)、松水久秀・三好三人衆が大和制霸のため
に侵入し、大和国は戦地となつた。たび重なる戦乱の末、永祿五年
七月十六日に金剛寺城は潰されてしまつた。

検地年号不知 十市 那山へ三里

一高四百八拾石七斗壱升七合 金剛寺村

内九拾六石壱斗四升四合 式割半地

比反別式拾七町壱反五畝歩

内 但百石二七町六畝歩

上田拾式町八反五畝拾七步 上畠九町四反廿六步

中田三町五反式畝三步 中畠四反廿六步

下田四反五畝拾四步 下畠四反廿六步

此以拾六町八反三畝四歩 屋敷四反五畝廿壹歩

分米三百拾九石七斗四升壱合 比以拾町三反壱畝廿六步

但百石二六町五反八畝歩 分米百石拾石九斗七升六合

外 但百石二八町壱畝歩

一米式石式斗九合 定成改出し

上田壱反九畝廿八歩

一家數四拾四軒 内三拾八軒 本百姓

内六軒 水呑

一人數或百人 内百四人 男

武人 女

僧

一牛馬式定 内 壱疋牛

一職人壱人 壱疋馬

一商人壱人 大工

作酒 七軒

一出屋舎村家數九軒内壱軒 水呑 本百姓

宅軒 庵

御年貢地

一三拾八社 社地五拾六坪 無神主

除地

一觀音堂 廿坪

御年貢地 廣澤村常念寺米麥

一淨土宗

同前

一淨土宗

西本願寺派

一水車巷ヶ所

伴戸村

一郷藏屋敷

四郎兵衛

一但高内

興正寺下

道場

巷ヶ所

但高内

(金剛寺分抜持)

〔解説〕

近世に入り、金剛寺村は幕府領（高七四四・八一石、代官橋原監物）となり、松本村と合村するようになった。しかし、寛永十六年（一六三九）、国替えにより、本多政勝が播磨國姫路より郡山へ入城し、その時、松本村（金剛寺を含む）が郡山藩に編入された。その後、貞享二年（一六八五）には、金剛寺村家数四拾軒程、人數武百式三十人とみえ（郡山御知行帳帳 天理圖書館文書）、この年以前に松本村より高分け（四八〇・七一七石、一割半無地増高）分離した。

史料 11

淨照寺末寺由緒書抄 田原本・淨照寺文書

（田原本町史史料編第二巻 所収）

寛政元西歲

御触下由緒書

二月 日

〔前略〕

松平中斐守殿領分子市郡金剛寺村

一比之度被為仰出候三ヶ条之趣奉候、早速吟味仕候處、由來書等も無之候故、何之年之建立と申事も相分り不申候、

一上寺ハ京都興正寺ニ御座候、然ル処遠方ニ御座候故、宗旨ノ折ハ掛所高市郡土橋村専念寺を相頼申候、

一御本尊證如上人御裏書共外ニ宝物無御座候、右御尋ニ付嗣々奉申上候、

〔後略〕

金剛寺幅員東西五可十五間南北六町十一間 稅地田二十四町五

反三畝十二步 烟六町二反六畝二十四步 宅地一町二反五

畝二十六步 藪地一反二畝二十六步 貢租金總計五百九十一

圓三十一錢六厘 戸數本籍三十三戸 口數合計百八十五人

内男九十人 女九十五人 牛數牡牛三頭 車數荷車四輛

河渠飛鳥川 重坂川 橋梁ダイヤ橋 南浦橋 西口橋

間伏溝 三ノ坪溝 南浦溝 ウシハキ溝 内田堀 南浦堀

森林土手矢倉森 堤堵飛鳥川堤 飛鳥川講堵 重坂川堤

神社三十八社 野神祠 八坂神祠 寺院金正寺 物産米

二百九十六石五斗 麦百十四石三斗 小麥十六石五斗 大

豆七石五斗 豆三十七石 菜種二十石 草綿三千斤 葉

煙草二千斤 總代植島藤四郎

(金剛寺分抜粋)

史料 13 金正寺寺院明細帳 (権原市・高宮茂道文書)

明細帳

奈良縣管下大和國十市郡平野村大字金剛寺

總本山本願寺末

真宗本願寺派金正寺

一本草

阿彌陀如來木佛立像一体 縱一尺二寸

巾四寸

不詳

一由緒

明治廿四年 月 日

右之通相違無之候也

右金正寺無住二付

兼務住職 永田善照印
右櫻家越代

鈴木宗七印
福井伊重郎印

一本堂

一庫裏

一門

一雪隱

一境內五拾四坪

一境內佛堂

一境內庵室

一境外所有地

耕地地反別毫畝拾步

十市郡平野村大字金剛寺小字土手矢倉

地主 金正寺

地價三円五拾六錢

耕地地反別毫畝拾四步八郡全村大字全小字西原

地主 金正寺

地價三円五拾六錢

耕地地反別毫畝拾四步八郡全村大字全小字西原

地主 金正寺

地價八円六拾四錢

郡村宅地反別毫畝拾九步八村全村大字全小字西原

地主 金正寺

百五十二人

民有地第一種

無之

無之

金正寺

地主 金正寺

吉岡與市郎

金石文 一 五輪塔 元龜元年（一五七〇） 金正寺境内

前書之通相達無御座候也
村長 櫻井知則

吉岡與市郎

明細帳附屬

什寶器物帳

境内実測圖

境内見取図

略

梵 弘誓大德
元龜元年
六月廿六日

史料 14 「進門精舍舊詞第六冊」淨土宗全書統十八卷

○阿彌陀寺常念寺末大和國十市郡金剛寺村起立開山不知中興雲大德剃髮之所師匠當念寺樂譽上人弟子也靈雲死去竟水十四年三月五日至元祿九年六十年已上

（金剛寺分抜粋）



境内地の井戸の傍にあり、水巣の台石として使われている。空・風・火・水部は喪失し、地輪部（高さ 20.7cm、幅 29.5cm）に上のような陰刻銘がある。境内池には、他にもう 1 基混成された五輪塔（写真左）があるが、風化されているため、判読できない。

金石文2 背光五輪板碑 江戸時代中期頃 金正寺境内

妙栄信
淨闇信士 十一月十六日
祐真信士
梵



境内地の庭に五輪塔の残欠とともに集められていたものである。基部は欠損している。現高33.8cm、最大幅18.7cm、基部ちかくの幅16.9cmを計る小形品である。舟形の板碑で基部側がやや狭ぼる形で、裏面は粗く加工し、かまぼこ状を呈している。表面は外枠と五輪を浮きぱりにしている。安山岩と思われる。左隣に十字の刻銘があり、後刻の可能性があるが、注目される。他に境内地には、無銘の墓塔が一基ある。

金石文3 石燈籠 文化二年（一八〇五） 弥都波能充神社鳥居前

正月吉日 文化二年
御神燈



この時期最も多く作られる石燈籠で、高さ166cmを計る。また、境内地には明治に作られた太神宮燈籠が二基ある。

金石文4 狗天保十四年（一八四三） 弥都波能充神社拝殿前

東面 中子氏

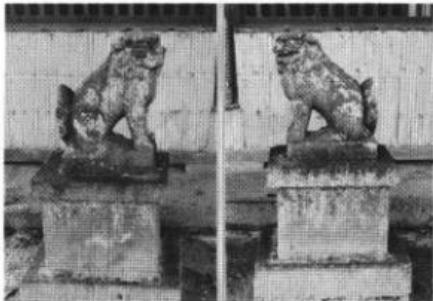
西面 天保十四卯年

南の狛犬

北の狛犬

東面
中子氏

西面
九月吉日
大坂



金剛寺村の氏子達が奉納した幕末期の狛犬である。狛殿に向かって北側の狛犬は、銘文が風化して判読できないが、おそらく大阪の石工の名前と思われる。この時期、各地で水運を利用していたので、大阪・堺より船に乗せ、大和川・曾我川を遡り、当地近くの松本の浜で陸揚げして運ばれたのであろう。

金石文 5 金正寺木造阿弥陀如来立像（『田原本町の佛像』所収）

(1) 像背表 金泥書

興正寺門徒専念
大和國十一郡金剛寺村

總道場

金正寺

(2) 右足柄外側 墨書

祥見 康雲

田原本町埋蔵文化財調査概要10
—金剛寺遺跡発掘調査概報—
昭和63年3月31日

発行 田原本町教育委員会
印刷 関西美術印刷株式会社